

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

— 2011年度 —

愛媛大学埋蔵文化財調査室

2013

序 文

国立大学法人愛媛大学の敷地は、松山市内および愛媛県内各所に点在し、敷地総面積は464ヘクタールに及ぶ。そのうち、大学本部と4つの学部が所在する城北団地には文京遺跡・道後桶又遺跡、農学部と附属高等学校がある樽味団地には樽味遺跡、国際交流会館がある鷹子団地では鷹子遺跡、教職員宿舎のある北吉井団地では桑原西稻葉遺跡など、数多くの遺跡がある。愛媛大学では、埋蔵文化財調査室を設置し、校舎建設や營繕工事等の際、埋蔵文化財への影響度をはかるための試掘調査を行い、埋蔵文化財が諸工事で影響を受ける場合には、影響度に応じて全面調査、立会調査の発掘調査を実施してきた。さらに、大学構内における遺跡の有無や精度の高い分布状況を把握する確認調査を実施し、埋蔵文化財の保護に努めている。

こうした発掘調査成果を客観的に資料化し、調査報告書にまとめて公開することによって遺跡の評価が行われる。ところが、愛媛大学の場合、出土品の多さと頻繁な発掘調査によって、速やかな報告書刊行を容易に行えない状況にあった。こうした状況を開闢するため、小規模調査である試掘・立会・確認調査についての報告と、本格調査の概要報告を併せた『埋蔵文化財調査室年報』を刊行してきた。2010年度以降、小規模調査の正式報告書も年報で報告する形式をとってきた。本書は、その2011年度に実施した埋蔵文化財調査等をまとめた年報である。

以上の報告と同時に本書では、愛媛大学附属図書館に所蔵されていた『鈴木栄一郎・西田栄資料』の受け入れ報告、附論として皇學館大学の外山秀一先生に分析していただいた研究成果を掲載している。愛媛大学埋蔵文化財調査室が開設されて四半世紀が経過したが、これまで実施してきた発掘調査、整理、分析の成果は膨大な量にのぼる。また、前述のように学内所蔵資料の受け入れなどによる新資料もある。こういったデータを蓄積すると同時にそれらを活用した研究成果を公開していくことも愛媛大学埋蔵文化財調査室の責務の一つである。

最後になりましたが、本書をまとめにあたっては、学内はもとより学外の多くの機関・個人の方々から協力を得た。その方に深く感謝するとともに、本書が多くの方々に利用・活用されることを願っております。

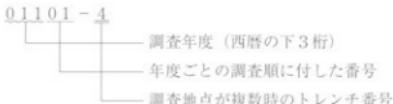
平成25年3月1日

愛媛大学埋蔵文化財調査室長

田崎博之

例　　言

1. 本書は、愛媛大学埋蔵文化財調査室が2011年度に実施した事業、特に大学構内で実施した試掘・立会・確認形式で行った小規模調査の成果等を報告する愛媛大学埋蔵文化財調査室年報であり、愛媛大学埋蔵文化財調査報告XXXIVにあたる。
2. 埋蔵文化財調査室では、本格全面調査・構内遺跡確認調査については、遺跡ごとに調査次数を付しているが、同時に、1975年から始まった大学構内の発掘調査まで遡って、立会・試掘形式の小規模調査も含めて、すべての調査に調査番号を与えている。調査番号は、西暦の下3桁の後に年度ごとの調査順に01からの2桁の通し番号を加えた5桁の番号で表示している。調査番号に加えて、複数の地点（トレンチ）を調査した場合、ーの後に地点番号を付して表示している。



3. 本書では、遺構番号に冠して、掘立柱建物:SB、竪穴式住居:SC、溝:SD、炉跡・竈:SF、横列:SA、水田:SS、土塙:SK、柱穴・小穴:SP、幕:SQ、自然流路:SR、その他の遺構:SXの記号で遺構の種別を表している。
4. 本書で表示した方位・標高数値は、本格調査においては、日本測地系（Tokyo Datum）平面直角座標系第IV系にしたがっている。ただし、試掘・立会調査・確認調査で座標系が利用できなかった場合は、調査地点周囲の平板測量成果を掲載し、磁北を表示している。
5. 土色・遺物の色調は、1991年以降、小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）『新版標準土色帖』に準拠しているが、本文中ではマンセル記号は省略した。
6. 本書に使用した遺構図は、田崎博之・三吉秀充・宮崎直栄・田中いづみ・下山貴生が作成し、写真を行った。
7. 本書で使用した遺物図は、田中いづみが実測・写真を行った。
8. 本書で使用した写真は、田崎・吉田・三吉が撮影した。
9. 本書は田崎・吉田広・三吉・附論は外山秀一（皇學館大学）が執筆した。
10. 本書に報告した調査に係わる記録類・出土遺物は、愛媛大学埋蔵文化財調査室において保管している。
11. 本書は三吉が編集を行った。

本文目次

I	埋蔵文化財調査委員会と埋蔵文化財調査室の事業	1
1	埋蔵文化財調査委員会	1
(1)	第1回埋蔵文化財調査委員会	1
(2)	第2回埋蔵文化財調査委員会	1
2	2011年度の埋蔵文化財調査室の事業	3
(1)	調査と体制	3
(2)	整理作業	4
(3)	印刷物の刊行	5
(4)	広報、資料等の利活用	6
II	2011年度の発掘調査	11
01005	(城北団地) 第3体育館新設その他工事に伴う発掘調査（文京遺跡45次調査）	11
01101	(城北団地) 学内保育園改修工事に伴う発掘調査（文京遺跡46次調査）	32
01102	(城北団地) 旧教育学生支援部事務室改修工事に伴う発掘調査（文京遺跡47次調査）	39
01103	(城北団地) 教育学部4号館ブレイルーム等改修工事に伴う発掘調査（文京遺跡48次調査）	41
01105	(持田団地) 附属小学校プール改修工事に伴う発掘調査（持田遺跡4次調査）	44
III	愛媛大学附属図書館所蔵の『鈴木栄一郎・西田栄資料』の受け入れについて	49
附論	文京遺跡における縄文時代後晩期の微地形復原	55

挿図目次

図1	城北団地調査地点位置図（縮尺1/2,000）	9・10
図2	01005調査（文京遺跡45次）Ⅲ層・Ⅳ・1層上面 検出遺構全体図（縮尺1/200）	13・14
図3	01005調査（文京遺跡45次）調査区東端南北土 層断面図（縮尺1/40）	15・16
図4	01005調査（文京遺跡45次）Ⅳ・2層下部上面檢 出遺構全体図（縮尺1/200）	21・22
図5	01005調査（文京遺跡45次）Ⅳ・3層以下検出遺 構全体図（縮尺1/200）	25・26
図6	01101調査（文京遺跡46次）愛媛県教育委員会 からの通知の調査範囲	33
図7	01101調査（文京遺跡46次）地点位置図（縮尺 1/500）、SQ-1実測図（縮尺1/100・1/20）、土 層柱状図（縮尺1/40）	34
図8	01101調査（文京遺跡46次）SQ-1遺物実測図（縮 尺1/4）	38
図9	01102調査（文京遺跡47次）地点位置図（縮尺 1/500）および3・4地点土層柱状図（縮尺 1/40）	39
図10	01103調査（文京遺跡48次）愛媛県教育委員会 からの通知の調査範囲	41
図11	01103調査（文京遺跡48次）地点位置図（縮尺 1/500）および2・3区土層柱状図（縮尺1/60）	43
図12	01105調査（持田遺跡4次）地点位置図（縮尺 1/500）	-

1/500) および土層柱状図（縮尺1/50）	44	図14 縄文時代後晩期の微起伏	57
図13 01105調査（持田遺跡4次）地点位置図（縮尺 1/2,000）	45	図15 縄文時代後期の遺構と遺物の分布	57

写 真 目 次

写真 1 (城北団地) 横又地区植栽その他業務工事立会	4	写真23 01005調査 SX-448検出状況（北から）	18
写真 2 (城北団地) 横又地区植栽その他業務工事立会	4	写真24 01005調査 SX-448完掘状況（南東から）	18
写真 3 (城北団地) 評価環境システム納入に伴う空調室外機基礎工事立会	4	写真25 01005調査 SX-448完掘状況（北から）	18
写真 4 (城北団地) 評価環境システム納入に伴う空調室外機基礎工事立会	4	写真26 01005調査 SX-448南北土層（土層剥ぎ取り部分）	18
写真 5 (城北団地) 評価環境システム納入に伴う空調室外機基礎工事立会	5	写真27 01005調査 土層剥ぎ取り作業の様子	18
写真 6 (城北団地) 教育学部美術科窯芸・鑄造室新築に伴う盛土工事立会	5	写真28 01005調査 SX-448切り取り作業の様子	18
写真 7 (城北団地) 教育学部美術科窯芸・鑄造室新營その他工事立会	5	写真29 01005調査 SX-448切り取り作業の様子	18
写真 8 (城北団地) 教育学部美術科窯芸・鑄造室新營その他工事立会	5	写真30 01005調査 東区SR-103検出状況（北西から）	19
写真 9 (城北団地) 教育学部美術科窯芸・鑄造室新營その他工事立会	5	写真31 01005調査 東区SR-103完掘状況（北西から）	19
写真10 公開講座の様子（1）	7	写真32 01005調査 東区SR-103遺物出土状況（西から）	19
写真11 公開講座の様子（2）	7	写真33 01005調査 東区SR-103遺物出土状況（北東から）	19
写真12 公開講座の様子（3）	7	写真34 01005調査 東区IV-3層上面検出遺構完掘状況（南から）	19
写真13 公開講座の様子（4）	7	写真35 01005調査 東区IV-3層上面検出遺構完掘状況（北から）	19
写真14 01005調査 調査前の状況（北西から）	12	写真36 01005調査 西区南部IV-3層上面検出遺構完掘状況（北西から）	19
写真15 01005調査 東区IV層上面検出遺構完掘状況（南から）	12	写真37 01005調査 西区西部IV-3層上面検出遺構完掘状況（西から）	19
写真16 01005調査 東区IV層上面検出遺構完掘状況（南から）	12	写真38 01005調査 SX-223遺物出土状況（西から）	27
写真17 01005調査 SR-1完掘状況（西から）	12	写真39 01005調査 SK-219（南西から）	27
写真18 01005調査 SD-3完掘状況（南から）	12	写真40 01005調査 SK-144（南西から）	27
写真19 01005調査 SD-3遺物出土状況	12	写真41 01005調査 SK-142（東から）	27
写真20 01005調査 西区SD-3完掘状況（南西から）	12	写真42 01005調査 SX-316（北から）	27
写真21 01005調査 SD-4完掘状況（南西から）	12	写真43 01005調査 SK-318・319・320検出状況（西	
写真22 01005調査 SX-448検出状況（南東から）	18		

から)	27		
写真44 01005調査 SK-319遺物出土状況（西から）	27	写真69 01101調査 1区西端部（東から）	35
写真45 01005調査 SX-447上部炭化物・焼土塊出土状況（北から）	27	写真70 01101調査 1区東端部（南東から）	35
写真46 01005調査 SK-371炭化木検出状況（西から）	28	写真71 01101調査 2区位置（北から）	35
写真47 01005調査 SX-429炭化物・焼土塊出土状況（南西から）	28	写真72 01101調査 2区全景（北西から）	35
写真48 01005調査 SX-429下部の状況（南西から）	28	写真73 01101調査 2区土層断面（北西から）	35
写真49 01005調査 SX-432遺物出土状況（西から）	28	写真74 01101調査 3区全景（西から）	35
写真50 01005調査 SX-433遺物出土状況（西から）	28	写真75 01101調査 3区南西部掘り下げ状況（北西から）	36
写真51 01005調査 SK-423・428検出状況（西から）	28	写真76 01101調査 4区全景（北東から）	36
写真52 01005調査 SK-423遺物出土状況（北西から）	28	写真77 01101調査 5区全景（北東から）	36
写真53 01005調査 SK-423遺物出土状況（南から）	28	写真78 01101調査 5区東半部（北から）	36
写真54 01005調査 SK-428検出状況（西から）	29	写真79 01101調査 SQ-1 検出状況（南から）	36
写真55 01005調査 SK-427遺物出土状況（北から）	29	写真80 01101調査 SQ-1 調査状況（北西から）	36
写真56 01005調査 SK-439遺物検出状況（東から）	29	写真81 01101調査 5区西部SQ-1出土状況（南から）	37
写真57 01005調査 SK-440遺物出土状況（南から）	29	写真82 01101調査 SQ-1 出土状況（北東から）	37
写真58 01005調査 SK-440完掘状況（西から）	29	写真83 01101調査 SQ-1 墓壙完掘状況（西から）	37
写真59 01005調査 SK-441完掘状況（西から）	29	写真84 01101調査 SQ-1 完掘状況（北東から）	37
写真60 01005調査 II-2区西側完掘状況（東から）	29	写真85 01102調査 1地点全景（南東から）	40
写真61 01005調査 II-2区東側南壁（北西から）	29	写真86 01102調査 1地点土層確認状況	40
写真62 01005調査 II-2区完掘状況（東から）	30	写真87 01102調査 2地点全景（西から）	40
写真63 01005調査 II-2区東側完掘状況（西から）	30	写真88 01102調査 2地点土層確認状況	40
写真64 01005調査 現地説明会の様子	30	写真89 01102調査 3地点遠景（東から）	40
写真65 01005調査 現地説明会の様子	30	写真90 01102調査 3地点土層確認状況	40
写真66 01005調査 法文学部臨地講義の様子	30	写真91 01102調査 4地点全景（北東から）	40
写真67 01005調査 法文学部臨地講義の様子	30	写真92 01102調査 4地点土層確認状況	40
写真68 01101調査 1区位置（南西から）	35	写真93 01103調査 1区北半部全景（北側上方から）	42
		写真94 01103調査 1区北半部全景及び深掘り部分（南東から）	42
		写真95 01103調査 1区北半部深掘り部分土層断面（南東から）	42
		写真96 01103調査 2・3区遠景（北西上方から）	42
		写真97 01103調査 2区全景（南から）	42
		写真98 01103調査 2区土層断面（南西から）	42
		写真99 01103調査 3区全景（北西から）	42
		写真100 01103調査 3区土層断面（北から）	42
		写真101 01105調査 更衣室改修工事立会調査	46
		写真102 01105調査 更衣室改修配管設置立会調査	46

写真103	01105調査 電柱支線基礎立会調査	46
写真104	01105調査 更衣室北側土間立会調査	46
写真105	01105調査 ブール北側排水管工事立会調査 (西から)	46
写真106	01105調査 ブール北側排水管路東端部出土 の石垣(西から)	46
写真107	01105調査 調査区南半部全景(北西から)	47
写真108	01105調査 1・2トレンチ全景(北から)	47
		47
写真109	01105調査 1トレンチ土層	47
写真110	01105調査 2トレンチ土層	47
写真111	01105調査 調査区北半部全景(西から)	47
写真112	01105調査 9トレンチ南端部土層	47
写真113	01105調査 9トレンチ北側土層(東から)	47
写真114	資料保管状況1	49
写真115	資料保管状況2	49

表 目 次

表1	2011年度の埋蔵文化財調査委員会と 埋蔵文化財調査室の体制	1
表2	2011年度の埋蔵文化財調査依頼・照会一覧	3
		3
表3	2011年度発掘調査一覧	3
表4	2011年度調査室・調査室資料利用一覧	6
表5	図書館旧蔵資料一覧	51～54

資 料 目 次

資料1	国立大学法人愛媛大学 埋蔵文化財調査委員会規程	2
資料2	国立大学法人愛媛大学 埋蔵文化財調査室設置要項	2

I 埋蔵文化財調査委員会と埋蔵文化財調査室の事業

1 埋蔵文化財調査委員会

埋蔵文化財調査室は、「国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査委員会規定」(資料1)に基づき設置された埋蔵文化財調査委員会の下、業務運営を行っている。2011年度の埋蔵文化財調査委員会の体制は表1の通りである。2011年度の埋蔵文化財調査委員会は、2011年6月15日(第1回)と2012年3月26日(第2回)に開催された。

(1) 第1回埋蔵文化財調査委員会

第1回埋蔵文化財調査委員会では、議題1、平成22(2010)年度事業報告・会計報告、議題2、平成23(2011)年度事業計画・予算、議題3、平成23年度～26年度の中期計画について報告・審議された。

議題1に関して、田崎室長から実施事業報告(1. 発掘調査、2. 発掘調査報告書等刊行に向けた整理作業、3. 発掘調査報告書等の刊行、4. 利活用に係わる業務、5. 埋蔵文化財包蔵地の見直し作業)、会計報告について説明され、了承された。

議題2について、田崎室長から事業計画(1. 発掘調査、2. 発掘調査報告書等刊行に向けた整理作業、3. 発掘調査報告書等の刊行、4. 利活用に係わる業務)、平成23(2011)年度予算について説明され、了承された。

議題3について、田崎室長から埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した調査に関する報告書刊行状況につ

いて説明があり、概要報告にとどまり、正式報告書の刊行が遅れていることが報告された。この現状を解消するため平成23年度～26年度、文京遺跡における遺構集中地點にあたる文京遺跡12次調査、14次調査、16次調査の報告書の刊行を進め、この報告書の刊行計画に基づいた出土遺構・遺物の概要の記述作業、整理作業の計画、これに伴う埋蔵文化財調査室の体制整備について説明が行われ、了承された。

(2) 第2回埋蔵文化財調査委員会

第2回埋蔵文化財調査委員会では、議題1、平成24年度事業計画、議題2、平成24年度予算について報告・審議された。

まず、田崎室長から平成24(2012)年度事業計画(1. 発掘調査、整理作業、調査報告書・年報作成にかかる業務、2. 利活用にかかる業務)の説明が行われた。発掘調査、整理作業、調査報告書・年報作成にかかる業務としては①発掘調査、②整理作業、③発掘調査報告書・2011年度年報の作成と刊行である。利活用にかかる業務は、①発掘調査データ・出土品の利活用への対応、②公開講座の立案と実施、③調査室刊行物・パンフレットの発送・配布に関するものであり、了承された。つづいて、田崎室長から平成24(2012)年度予算案の説明が行われ、審議の結果、原案通り了承された。

表1 2011年度の埋蔵文化財調査委員会と埋蔵文化財調査室の体制

埋蔵文化財調査委員会			埋蔵文化財調査室		
	氏名	所属・役職		氏名	所属
委員長	渡邉 春重	理事(秘書担当)	室 長	田崎 博之	法文学部教授
委 員	赤間 道夫	法文学部長	調査員	吉田 広	ミュージアム准教授
委 員	田崎 博之	法文学部教授	調査員	三吉 秀光	法文学部助教
委 員	村上 恵通	東アジア古代鉄文化研究センター長	専門員	村上 恵通	東アジア古代鉄文化研究センター長
委 員	壽 卓三	教育学部長	専門員	川岡 勉	教育学部教授
委 員	川岡 勉	教育学部教授	教育支援者	宮崎 直栄	施設基盤部施設企画課
委 員	佐藤 成一	理学部長	教育支援者	田中いづみ	施設基盤部施設企画課
委 員	安川 正貴	医学部長	技能補佐員	井手野文江	施設基盤部施設企画課
委 員	村上 研二	工学部長	技能補佐員	坂本あさき	施設基盤部施設企画課
委 員	仁科 弘重	農学部長	事務補佐員	矢野 宜子	施設基盤部施設企画課
委 員	上甲 兑和	経済学部長	研究支援者	下山 貢生	施設基盤部施設企画課 (2011年6月1日～9月30日)
委 員	西尾 許氣	財務部長	技能補佐員		施設基盤部施設企画課 (2011年10月1日～2012年3月31日)
委 員	大矢 浩二	施設基盤部長			

資料1 国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査委員会規程

(設置)

第1条 国立大学法人愛媛大学（以下「法人」という。）に、国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(任務)

第2条 委員会は、文化財保護法（昭和25年法律第214号）に基づき、法人の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議する。

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学長が指名する理事、副学長又は学長特別補佐1人
- (2) 各学部長
- (3) 発掘調査に関連のある専門分野の教員若干人
- (4) 経営企画部長、財務部長及び施設基盤部長

2 前項第3号の委員は、学長が任命する。

3 第1項第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員を生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、前条第1項第1号の委員をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名する委員がその職務を代行する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要があると認めるときは、委員以外の者を出席させ、説明又は意見を聞くことができる。

(調査室)

第6条 委員会に、委員会が定める基本方針に基づき発掘調査を実施し、その結果について報告書を作成するため、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

2 調査室に関する要項は、委員会の議を経て、別に定める。

(事務)

第7条 委員会に関する事務は、施設基盤部施設企画課において処理する。

(雑則)

第8条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附則 この規程は、平成21年4月1日から施行する。

資料2 国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査室設置要項

第1 この要項は、国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査委員会規程第6条第2項の規定に基づき、国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

第2 調査室は、国立大学法人愛媛大学（以下「本学」という。）の敷地内の施設整備に伴う埋蔵文化財の調査研究に関する次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 実施計画の立案及び実施に関すること。
- (2) 遺物の整理及び保管に関すること。
- (3) 報告書の作成に関すること。
- (4) 出土埋蔵文化財及び調査成果の公開及び利活用に関すること。
- (5) 本学の学生及び教員への実践的な教育及び研究の支援に関すること。
- (6) その他必要な事項

第3 調査室に、室長、調査員その他所要の職員を置く。

第4 調査室に、必要に応じて、埋蔵文化財の調査研究に関し、それぞれの専門分野から特別な知識及び技術について協力及び助言を得るため、専門員を置くことができる。

第5 室長、調査員及び専門員は、国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）の議を経て、学長が任命する。

第6 室長、調査員及び専門員の任期は、委員会の議を経て、学長が定める。

第7 室長は、調査室に関する業務を掌理する。

2 調査員は、室長の指示の下、埋蔵文化財の調査研究に関する業務を行う。

第8 調査室に関する事務は、施設部において処理する。

第9 この要項に定めるもののほか、調査室の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附則 この要項は、平成16年8月4日から施行する。

2 2011年度の埋蔵文化財調査室の事業

(1) 調査と体制

埋蔵文化財調査室は、埋蔵文化財調査委員会の下、「国立大学法人愛媛大学埋蔵文化財調査室要項」(資料2)に従い、発掘調査の実施計画の立案および実施、出土資料の整理・保管、報告書の作成と調査成果の公開・利活用、本学における教育・研究の支援業務を行っている。

埋蔵文化財調査室では、愛媛大学構内における地盤

掘削を伴う諸工事に際して、規模の大小に関わらず、工事内容による埋蔵文化財への影響を周辺における既往の調査などから判断し、それに応じた対応を行っている。2004年度、国立大学法人愛媛大学発足以降、愛媛県教育委員会・松山市教育委員会と協議を重ね、2007年度から、周知の埋蔵文化財包蔵地においては、文化財保護法第93条に基づき、規模の大小にかかわらず、工事着手の60日前までに、土木工事届を提出して

表2 2011年度の埋蔵文化財調査依頼・照会一覧

件付	発 生	工 事 名	意 見 書	回 答 文 書	対 応	
					上工事届	調 査
6月6日	施設基盤部長	(城北道地) 学内保育所改修工事	6月8日	周辺の既往調査から工事地点の一部が埋蔵文化財への影響が及ぶと判断。	6月20日	本格調査(文京46次調査) 7月19日～8月13日
5月20日	施設基盤部長	(城北道地) 横又地区植栽その他業務	5月24日	既設掘削部分の内側削り及び部分の外側削りであり埋蔵文化財への影響が及ばないと判断。	～	工事立会 5月24日
6月9日	施設基盤部長	(城北道地) 施工外排水管等改修工事	6月16日	既設掘削部分の外側削りであり埋蔵文化財への影響が及ばないと判断。	～	慎重工事 ～
6月21日	施設基盤部長	(城北道地) 旧学生支援部事務室改修工事	6月21日	周辺の既往調査から工事地点の一部が埋蔵文化財への影響が及ぶと判断。	6月22日	本格調査(文京47次調査) 9月6日
7月27日	施設基盤部長	(城北道地) 旧学生支援部事務室改修工事	8月8日	既設掘削部分の内側削り及び埋蔵文化財への影響が及ばないと判断。	～	慎重工事 ～
9月8日	施設基盤部長	(城北道地) 教育学部4号館ブレイルーム等改修工事	9月15日	周辺の既往調査から報削削り及び埋蔵文化財との間の距離が30cm未満と判断。	9月21日	本格調査(文京48次調査) 10月22日～10月26日
11月10日	社会連携課長	(城北道地) 評議場環境システム納入 に伴う空調室外機基礎工事	11月11日	周辺の既往調査から埋蔵文化財へ影響が及ばないと判断。	11月25日	工事立会 12月12日
12月5日	財務部長	(横山道地) 植栽地内電柱建柱工事	12月5日	既設掘削部分の内側削り及び埋蔵文化財への影響が及ばないと判断。	～	慎重工事 ～
12月13日	施設基盤部長	(持田道地) 諸属小学校プール改修工事	12月14日	周辺の既往調査から工事地点の一部が埋蔵文化財への影響が及ぶと判断。	12月21日	本格調査(持田4次調査) 2012年3月2日
12月21日	施設基盤部長	(城北道地) 浴衣洗剤第一共用施設等改修機械設備工事	12月22日	既設掘削部分の内側削り及び埋蔵文化財への影響が及ばないと判断。	～	慎重工事 ～
12月26日	施設基盤部長	(城北道地) 教育学部美術特需芸術教室新築に伴う盛土工事	12月28日	既設掘削部分の内側削り及び埋蔵文化財への影響が及ばないと判断。	1月10日	工事立会 2012年2月15日
1月11日	施設基盤部長	(城北道地) 教育学部美術特需芸術教室新設その他工事	1月21日	周辺植栽(黒竹) の移植に伴う工事あり、既往の既往調査から埋蔵文化財への影響が及ばないと判断。	～	工事立会 2012年1月23日
1月25日	施設基盤部長	(持田道地) 諸属小学校プール改修工事	1月25日	周辺の既往調査から工事地点の一部が埋蔵文化財への影響が及ぶと判断。	1月26日	工事立会 2012年2月15日～ 3月2日
2月27日	施設基盤部長	(城北道地) 第3体育館新宮機械設備工事	3月1日	既設掘削部分の内側削り及び埋蔵文化財への影響が及ばないと判断。	～	慎重工事 ～
3月12日	農学部長	(横山道地) 緊急維持に伴う削削について	3月13日	漏水に対する緊急処置として工事を実施。報告された工事範囲から周辺の既往調査から埋蔵文化財への影響が及んでいないと判断。	～	慎重工事 ～
3月12日	農学部長	(横山道地) 農学部消防栓配管設工事	3月13日	周辺の既往調査から埋蔵文化財への影響が及ばないと判断。	3月22日	工事立会 2012年度
3月29日	施設基盤部長	(城北道地) 第3体育館新宮機械設備工事	3月30日	周辺の既往調査から埋蔵文化財への影響が及ばないと判断。	～	慎重工事 ～

表3 2011年度発掘調査一覧

調査番号	団地	遺跡	工 事 名	調査類別	調査担当	調査期間	調査面積	出土遺物
01005	城北	文京45次	(城北道地) 第3体育館新宮その他工事	大規模調査	三吉・田崎	2011/3/22～ 11/17	14367m ²	65箱
01101	城北	文京46次	(城北道地) 学内保育園改修工事	小規模調査	田崎	7/19～8/3	815m ²	2箱
01102	城北	文京47次	(城北道地) 旧学生支援部事務室改修工事	小規模調査	田崎	8/18～9/6	331m ²	無
01103	城北	文京48次	(城北道地) 教育学部4号館ブレイルーム等改修工事	小規模調査	田崎	10/22～10/26	843m ²	無
01105	持田	持田4次	(持田道地) 諸属小学校プール改修工事	小規模調査	田崎	2012/3/2	208m ²	無

*調査番号01104は欠番



写真1 (城北団地) 植又地区植栽その他業務工事立会



写真2 (城北団地) 植又地区植栽その他業務工事立会



写真3 (城北団地) 評価環境システム納入に伴う空調室外機基礎工事立会



写真4 (城北団地) 評価環境システム納入に伴う空調室外機基礎工事立会

いる。この土木工事届に対する通知に基づき、発掘調査・工事立会・慎重工事等の対応を行っている。

2011年度における埋蔵文化財に対する影響への確認と調査依頼は17件あった（表2）。この調査依頼に対して、試掘調査や周辺における既往の調査成果から埋蔵文化財への影響を判断し、土木工事届等の所要の手続きを経た上で、4件について発掘調査を行った（表3）。この他に、2010年度から継続的に発掘調査を行っている文京遺跡45次調査の1件がある。調査室では、

発掘調査の規模に応じて、大規模調査と小規模調査に分類しているが、大規模調査1件、小規模調査4件となる。団地別では、城北団地で4件、持田団地で1件である。その他に工事立会は6件実施した。確認調査は実施しなかった。

(2) 整理作業

年報ならびに報告書刊行に向けた整理作業として、文京遺跡16次調査A区、文京遺跡16次調査B区の遺



写真5 (城北団地) 評価環境システム納入に伴う空調室外機基礎工事立会



写真6 (城北団地) 教育学部美術科窯芸・鋳造室新築に伴う
盛土工事立会



写真7 (城北団地) 教育学部美術科窯芸・鋳造室新築その他の
工事立会



写真8 (城北団地) 教育学部美術科窯芸・鋳造室新築その他の
工事立会



写真9 (城北団地) 教育学部美術科窯芸・鋳造室新築その他の
工事立会

構実測図整理・浄書作業、遺構写真整理・図版作成作業、遺物実測作業、遺物写真撮影作業を実施した。文京遺跡39次調査で採取した土壤の水洗作業、水洗した土壤から微細遺物の選別作業を実施した。また2011年度に調査を実施した文京遺跡45次調査、文京遺跡46次調査、文京遺跡48次調査から出土した遺物の洗浄・注記・復元作業、遺構実測図・全体図の整理・浄書作業を実施した。さらに文京遺跡45次調査で採取した土壤試料の水洗作業および微細遺物の選別作

業を実施した。

(3) 印刷物の刊行

2010年度に実施した全面調査の概要報告と小規模調査・立会調査などの報告をまとめた『埋蔵文化財調査室年報—2010年度—』(愛媛大学埋蔵文化財調査報告XXIII)を刊行した。

2010年度末に発送予定であったものの、2011年3月11日に発生した東日本大地震にともない延期してい

表4 2011年度調査室・調査室資料利用一覧

日時	利 用 者	利 用 資 料	目 的	利 用 内 容
1 2011/04/04	愛媛大学法文学部人文科学教員	施設見学	教育(博物館実習)	施設見学
2 2011/04/05	函南市文化財課職員	同行書籍	研究	書籍希望
3 2011/04/07	東アジア古代歴文化研究センター教員	所蔵図書	研究	借用
4 2011/04/14	愛媛大学法文学部人文科学教員	文京遺跡11次調査出土土器	研究	熟観
5 2011/05/06	愛媛大学法文学部・学生	文京遺跡出土石器	卒業論文	借用
6 2011/05/22	松野町教育委員会職員	所蔵図書	研究	文献複写
7 2011/05/20	戦争跡保存ネットワーク西園	文京遺跡・御寺遺跡出土遺物	展示	借用
8 2011/06/27	松野町教育委員会職員	所蔵図書	研究	文献複写
9 2011/06/30	東アジア古代歴文化研究センター研究員	測量器具・測量データ	教育	借用
10 2011/07/26	愛媛大学法文学部総合政策学科教員	文京遺跡45次調査現場・出土遺物	教育	見学・熟観
11 2011/08/19	愛媛大学ミュージアム教員	文京遺跡10次調査出土遺物	教育(博物館実習)	借用
12 2011/09/08	東アジア古代歴文化研究センター研究員	所蔵図書	研究	借用
13 2011/09/10	松山市内在住	刊行書籍	研究	書籍希望
14 2011/09/10	松山市内在住	刊行書籍	研究	書籍希望
15 2011/09/10	鹿島島三好市内在住	刊行書籍	研究	書籍希望
16 2011/09/10	松山市内在住	刊行書籍	研究	書籍希望
17 2011/09/10	松山市内在住	刊行書籍	研究	書籍希望
18 2011/09/10	松山市内在住	刊行書籍	研究	書籍希望
19 2011/09/19	愛媛県歴史文化博物館	文京遺跡出土遺物	展示	借用
20 2011/09/30	西条市教育委員会職員	所蔵図書	研究	文献複写
21 2011/10/05	香川県埋蔵文化財センター職員	文京遺跡45次調査現地説明会資料	研究	資料希望
22 2011/10/08	東京都市田舎市内在住	文京遺跡45次調査現地説明会資料	研究	資料希望
23 2011/12/07	松山市内在住	所蔵図書	研究	文献複写
24 2011/12/16	岡山県倉敷市内在住	刊行書籍	研究	書籍希望
25 2011/12/19	愛媛大学法文学部研究科学生	所蔵図書	研究	借用
26 2012/01/16	愛媛大学ミュージアム教員	旧歴史学研究会保管資料	教育	借用
27 2012/01/29	村上本草博物館職員	発掘調査情報	研究	照合
28 2012/02/20	松山市内在住	刊行書籍	研究	書籍希望
29 2012/03/07	松山市内在住	刊行書籍	研究	書籍希望
30 2012/03/13	香川県埋蔵文化財センター職員	文京遺跡出土生土器	研究	熟観
31 2012/03/21	鬼北町教育委員会職員4名	文京遺跡45次調査出土水洗廻回作業	研究	見学
32 2012/03/27	愛媛大学教説研究会(法文学部学生)	施設見学	取材	撮影

た『埋蔵文化財調査室年報—2008年度一』(愛媛大学埋蔵文化財調査報告XⅠ)、『埋蔵文化財調査室年報—2009年度一』(愛媛大学埋蔵文化財調査報告XⅡ)の東日本の諸機関等発送を実施した。

(4) 広報、資料等の利活用

埋蔵文化財調査室では、これまで実施してきた構内遺跡出土の遺物や調査に関するデータなどを保管している。これらの調査室保管資料に関して、学内外から資料の公開や利用の要望が寄せられてきた。これらの要望に対して、埋蔵文化財調査室では資料の一部については、2009年11月に開館した愛媛大学ミュージアムにおいて常設展示し、広報パンフレットの配布やWebを利用した情報発信、公開講座の企画・実施などを通じて積極的に広報活動を進めている。

①埋蔵文化財調査室保管資料の活用状況

2011年度、埋蔵文化財調査室保管資料等に対する資料申請件数は32件であった(表4)。内訳は学内11件、

学外21件である。件数は2010年度の20件に比べて増加傾向にある。また博物館実習に伴う施設見学などにも利用されている。

②広報パンフレットの配布

埋蔵文化財調査室では、広報パンフレット『発掘愛媛大学』を作成し、希望者には随時配布している。2011年4月には、新入学生ならびに新規採用職員を対象として約2,100部を配布した。

③公開講座の開催

平成23年度愛媛大学公開講座『文京遺跡から学ぶ(7)―交流から見た縄文・弥生・古墳時代社会―』を以下の日程で開催した(写真10~13)。

第1回 9月10日(土) 佐々木正治「考古学からみる古代東アジア世界の形成」

第2回 10月8日(土) 田崎博之「縄文時代から弥生時代における対外交流」



写真10 公開講座の様子（1）



写真11 公開講座の様子（2）



写真12 公開講座の様子（3）



写真13 公開講座の様子（4）

第3回 10月22日（土） 三吉秀充「焼き物から見た対外交流①」

第4回 10月29日（土） 三吉秀充「焼き物から見た対外交流②」

第5回 11月19日（土） 田崎博之・三吉秀充・佐々木正治「討論」

講座では文京遺跡を始めとした構内遺跡の発掘調査で実際に出土した青銅製品・鉄製品・焼き物を探り上げ、対外交流の視点から縄文時代・弥生時代・古墳時代の文京遺跡について解説した。年度末には平成23年度愛媛大学公開講座記録集『文京遺跡から学ぶ（7）』を刊行し、受講生ならびに関係機関に配布した。

④Webを利用した広報活動

埋蔵文化財調査室では、2004年度にホームページを開設し、発掘調査や情報発信を行っている。2011年度には、文京遺跡45次発掘調査速報（調査画像や調査動画）や公開講座情報を随時更新した。

（愛媛大学埋蔵文化財調査室ホームページアドレス
<http://www.ehime-u.ac.jp/~maibun/index.htm> 内の

「2011年度のTOPICS」を参照）

⑤愛媛大学ミュージアム展示品関連事業

埋蔵文化財調査室は、2009年11月に開館した愛媛大学ミュージアム「人間の営み」ゾーンにおいて、文京遺跡を中心とした構内遺跡出土資料の展示を行っている。

⑥現地説明会等の開催

2011年3月から同年11月まで発掘調査を実施した文京遺跡45次調査において、一般市民を対象とした現地説明会を2011年9月4日（日）、10月16日（日）の2回開催した。台風の接近や秋雨などによる悪天候にもかかわらず、のべ約60人が参加した。7月26日（火）には、66年前の松山空襲を振り返る行事の一環で、愛媛大学法文学部教員・学生、当時練兵場で訓練を受けた方々によって見学会が開催され、調査区内の整塚や出土した薬莢が展示された。さらに発掘調査期間中には法文学部学生を対象とした臨地講義としても利用された。

⑦その他

長らく愛媛大学附属図書館に所蔵されていた「鈴木栄一郎・西田栄資料」を埋蔵文化財調査室に受け入れた。資料受け入れに伴い基礎的な整理を行った。資料受け入れの経緯や資料の概要について本書Ⅲ章で報告を行っている。(三吉)

图1 城市用地属性点位图(R1 / 2000)



図 1 (折込)

裏

II 2011年度の発掘調査

2011年度は、2010年度に着手した01005調査（文京遺跡45次調査）、01001調査（文京遺跡46次調査）、01102調査（文京遺跡47次調査）、01103調査（文京遺跡48次調査）、01105調査（持田遺跡4次調査）の発掘調査を行った。本年報では01005調査（文京遺跡45次

調査）の概要報告、01101調査（文京遺跡46次調査）、01102調査（文京遺跡47次調査）、01103調査（文京遺跡48次調査）、01105調査（持田遺跡4次調査）の正式報告を行う。

01005（城北団地）第3体育館新営その他工事に伴う発掘調査 (文京遺跡45次調査)

調査地點	松山市文京町3番 城北団地
調査面積	1436.7m ²
調査期間	2011年3月22日～2011年11月17日
調査の種別	本格調査（大規模調査）
調査担当	田崎博之・三吉秀允
調査補助	宮崎直栄・田中いづみ・下山貴生
依頼文書	施設基盤部長発事務連絡（平成22年10月15日付）

1. 調査にいたる経緯

2010年10月、施設基盤部から城北団地構内北西部における第3体育館新営工事計画が提示された。埋蔵文化財調査室は、周辺における調査成果を基にして意見書を作成し、同年11月11日、松山市教育委員会を通じて愛媛県教育委員会に土木工事届けを提出した。これに対して、愛媛県教育委員会より同年11月26日付けで建物本体工事部分などに関して、発掘調査が必要であるとの指示があった。これを受けて、同年12月14日付で発掘調査に係わる届出を行い、同年12月17日、愛媛県教育委員会に受理された。

第3体育館新営工事の工期との関係から、発掘調査に係わる届出受理と同時に発掘調査に着手するべく準備を進めていたが、発掘調査地周辺における環境整備の関係から、発掘調査の着手は2011年3月22日までずれ込むこととなった。

2. 調査の記録

（1）調査の概要

2011年3月22日から、重機による表土層の掘り下げ作業を開始した（写真14）。調査区全体の土層堆積状

況を確認するため、本体部分調査区の東側に幅約2mにわたって先行調査区を設けて、土層の堆積状況を確認した（図2・3）。ここでの土層堆積状況の理解を基に全体の調査を進めた。

調査では本体部分調査区をI区、本体部分の南側管路部分をII区とした。I区は、調査区のはば中央を南北に走る管路部分を中心とした東西幅1.8～27mを南北方向の土層觀察畦とし、この土層觀察畦の西側を西区、東側を東区とした。東区の西側部分、西区の中央部分は体育館の構造上、発掘調査を進めることができないことから、表土層を掘り下げた後、IV-1層あるいはIV-2層下部で検出した遺構の調査に止め、現地保存することとした。しかし、調査区中央部で検出した焼土塊やサヌカイトの集中遺構が調査対象外地点に統一していたため、遺構の性格を考慮した結果、調査区を拡張し調査を行った（中央部拡張区）（写真51～59）。

【I区の調査】

（a）Ⅲ層上面検出遺構（中世）（図2）

Ⅲ層上面で自然流路1条（SR-1）を検出した。

SR-1：上端幅約4.8m、深さ約65cmを測り、調査区南部を東西方向に流れる。流路埋土中から土師器や瓦器碗などが出土している。SD-2・3・4・5を切る（写真17）。

（b）IV-1層上面検出遺構（弥生時代～古墳時代）（図2）

IV層上面で検出した遺構は溝7条（SD-2～6・12・25）、土壙17基（SK-7～11・19・22～24・35～37・39・57～60）、その他の遺構1基（SX-32）である。

①溝

SD-2：東区南東部で検出した。SR-1・SD-3に切ら



写真14 01005調査 調査前の状況（北西から）



写真15 01005調査 東区IV層上面検出遺構完掘状況（南から）



写真16 01005調査 東区IV層上面検出遺構完掘状況（南から）



写真17 01005調査 SR-1完掘状況（西から）



写真18 01005調査 SD-3完掘状況（南から）



写真19 01005調査 SD-3遺物出土状況



写真20 01005調査 西区SD-3完掘状況（南西から）



写真21 01005調査 SD-4完掘状況（南西から）

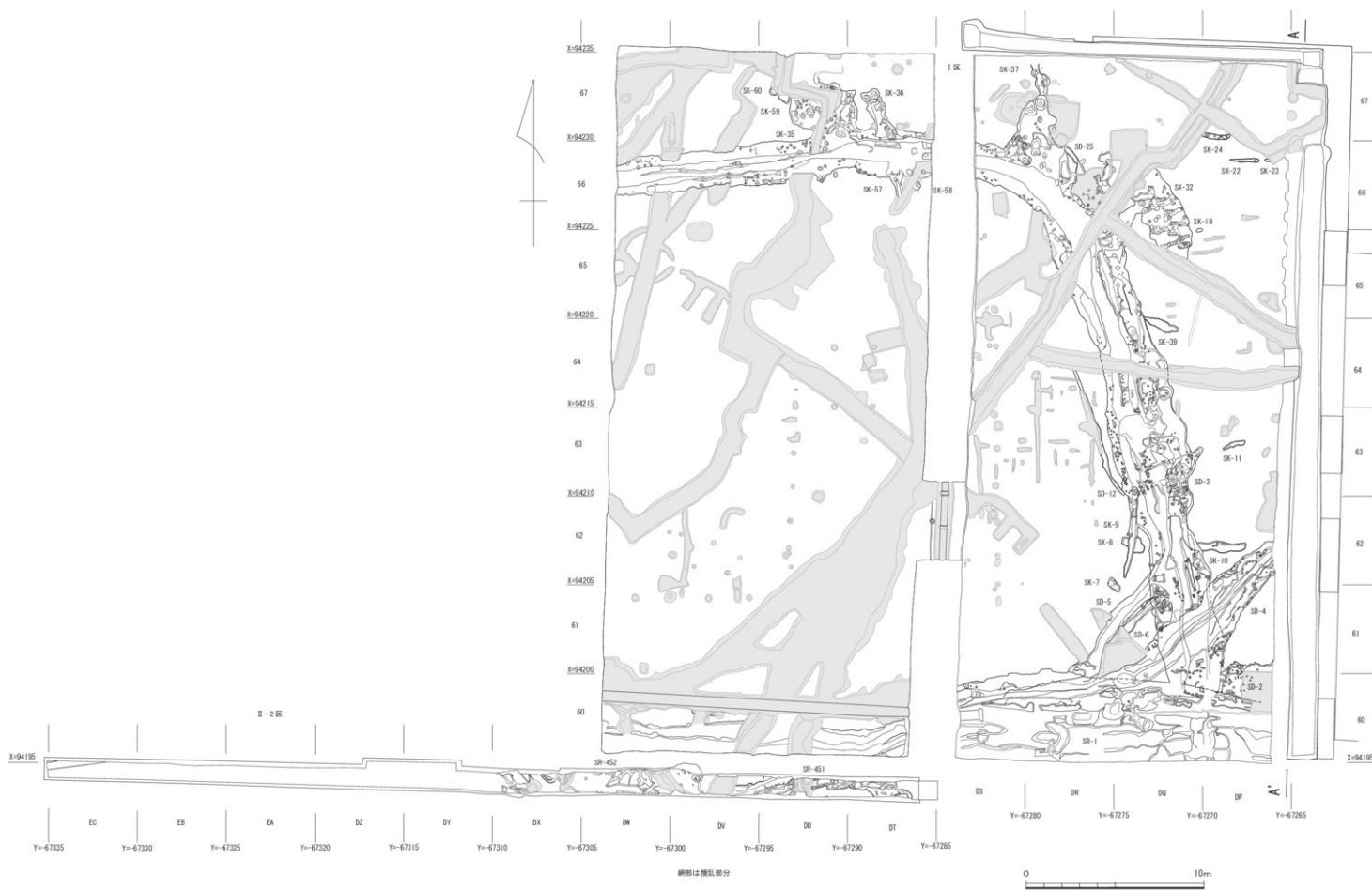


図2 01005調査（文京遺跡45次）Ⅲ層・Ⅳ・1層上面検出遺構全体図（縮尺1／200）

図2（折込）

裏

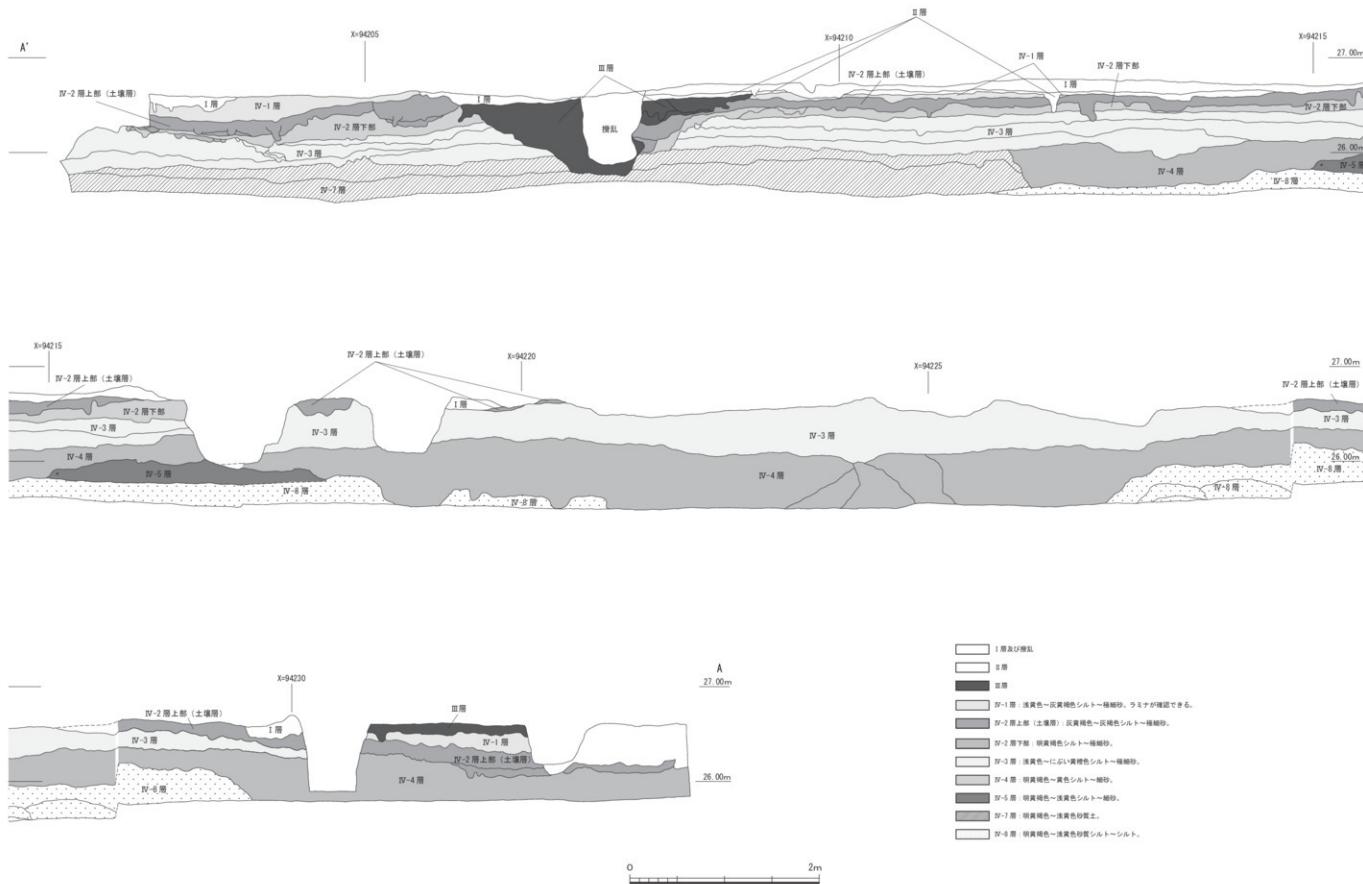


図3 01005調査（文京遺跡45次）調査区東端南北土層断面図（縮尺1/40）

図3（折込）

裏

れしており、溝幅は不明である。検出部分では深さ約20cmを測る。埋土は灰黄褐色砂層で、にぶい黄橙色土のブロックが混じる。さらに径5mm～3cmの砂礫を多く含んでいる。埋土中から近世の陶磁器小片が1点出土しているが、埋土の特徴と遺構の切り合い関係によれば近世まで下るものではないことから混入品と考えている。

SD-3：調査区北部で検出した溝である。東区の南東部から北へのび東区北西隅付近で方向を西へ大きく変え、西区では東から西へのびる。上端幅2～3.8m、深さ約50cmの溝である。SR-1に切られ、SD-2・4を切る。埋土中から獸齒骨や古墳時代後期の須恵器・土師器片が出土している（写真18～20）。

SD-4：調査区南部を北東から南西方向へのび、調査区東区の中央辺りで方向を変える上端幅1.8～2.8m、深さ1.23mの溝である。溝の底部に幅12mの掘り込みがあり、一度掘り返されていることがわかる。埋土は灰色砂礫が主体である。出土遺物は少なく、繩文土器片が少量出土しているのみである。SR-1・SD-3・SD-5に切られる（写真21）。

SD-5：調査区の南部を北東から南西方向へと続く上端幅70～90cm、深さ33cmの溝である。SR-1・SD-3・6に切られる。SD-4を切る。埋土下部の砂礫層から土師器片が1点出土している。

SD-6：調査区南部を北東から南西方向へと続く、上端幅35～45cm、深さ10cmの溝である。埋土は灰黄褐色砂質土に砂礫をやや多く含む。SR-1・SD-3に切られ、SD-5を切る。土師器片が少量出土している。

SD-12：調査区東区DQ-63・DR-63・64で検出した南北約9m、最大幅30cm、深さ約3cmの溝である。埋土はにぶい黄褐色砂質土である。出土遺物はない。

SD-25：調査区東区DR-66で検出した長さ約1.5m、深さ5～13cm、幅20～55cmの溝。埋土は灰色砂質土である。

②土壤

SK-7：調査区東区DQ・DR-61・62で検出した長辺90cm、短辺48cm、深さ12cmの不定形の土壤。埋土は黒褐色砂質土が主体で、褐色シルトの不定形ブロックを多く含む。出土遺物はない。

SK-8：調査区東区DQ-62・63で検出した長さ62m、幅30cm、深さ13cmの土壤。埋土は黒褐色砂質土が主体で、褐色シルトのブロックをごく少量含む。出土遺物は古墳時代の土師器片が少量出土している。

SK-9を切る。

SK-9：調査区東区DQ-62で検出した長辺1.35m、幅0.95m、深さ約5cmの不定形の土壤。埋土はにぶい黄褐色砂質土が主体で、黒褐色シルトのブロックを多く含む。出土遺物はない。SK-8に切られる。

SK-10：調査区東区DP・DQ-62で検出した長辺3.4m、幅0.45～0.6m、深さ約5cmの土壤。埋土はにぶい黄褐色砂質土が主体で、径1cmの砂礫を少量含む。出土遺物は土師器細片が1点出土している。SD-3に切られる。

SK-11：調査区東区DP-63で検出した長辺1.35m、最大幅30cm、深さ2～3cmの土壤である。埋土はにぶい黄褐色砂質土で黒褐色シルトのブロックを多く含む。出土遺物はない。

SK-19：調査区東区DQ-65・66で検出した径16～20cm、深さ14cmの土壤。埋土はにぶい黄褐色砂質土でやや灰色みをおびる。

SK-22：調査区東区DP-66で検出した東西長1.7m、幅10～24cm、深さ4cmの土壤。埋土はにぶい黄褐色砂質土で径3～5mmの砂礫をやや多く含む。

SK-23：調査区東区DP-66・SK-22の東で検出した東西長30cm、幅14cm、深さ3cmの土壤。埋土はにぶい黄褐色砂質土で径3～5mmの砂礫をやや多く含む。

SK-24：調査区東区DP・DQ-67で検出した長辺1.6m、幅30cm、深さ5cmの土壤。埋土は暗褐色砂質土でにぶい黄褐色シルトが混じる。

SK-35：調査区西区DT・DU-67で検出した東西幅3.8m、南北長2.7m、深さ約45cmの土壤。SD-3の北側にとりつく。中央部分は壊壠によりすでに破壊を受けている。埋土はにぶい黄褐色砂質土で土層中にはラミナは見られない。埋土中から獸齒骨や古墳時代と考えられる土師器片が少量出土している。

SK-36：調査区西区DT-67で検出した南北長2.2m、最大幅1m、深さ24cmの土壤。SD-3の北側にとりつく。埋土はにぶい黄褐色砂質土である。埋土中から土師器片や繩文土器片が少量出土している。

SK-37：調査区東区DR-67で検出した南北長1.7m、最大幅84cmの土壤。南側で深さは21cm、北側で8cmを測る。土師器片や繩文土器片が少量出土している。埋土は灰黃褐色～オリーブ褐色砂質土である。

SK-39：遺構番号の重複により整理段階にSK-39へ変更。調査区東区DQ-64・65で検出した全長20.5m、最大幅60cm、深さ8cmの土壤である。埋土は暗褐色



写真22 01005調査 SX-44B検出状況（南東から）

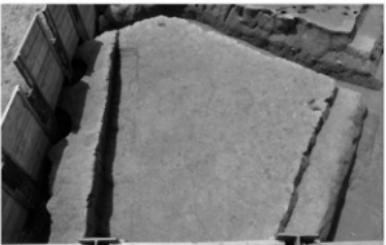


写真23 01005調査 SX-44B検出状況（北から）



写真24 01005調査 SX-44B完掘状況（南東から）



写真25 01005調査 SX-44B完掘状況（北から）



写真26 01005調査 SX-44B南北土層（土層剥ぎ取り部分）



写真27 01005調査 土層剥ぎ取り作業の様子



写真28 01005調査 SX-44B切り取り作業の様子



写真29 01005調査 SX-44B切り取り作業の様子



写真30 01005調査 東区SR-103検出状況（北西から）



写真31 01005調査 東区SR-103完掘状況（北西から）



写真32 01005調査 東区SR-103遺物出土状況（西から）



写真33 01005調査 東区SR-103遺物出土状況（北東から）



写真34 01005調査 東区N-3層上面検出遺構完掘状況（南から）



写真35 01005調査 東区N-3層上面検出遺構完掘状況（北から）



写真36 01005調査 西区南部N-3層上面検出遺構完掘状況（北西から）



写真37 01005調査 西区西部N-3層上面検出遺構完掘状況（西から）

砂質土で褐色砂質土、黒褐色砂質土やにぶい黄褐色シルトのブロックを含む。

SK-57：調査区西区DT-66で検出した長辺1.1m、幅33cm、深さ34cmの土壤である。南側は搅乱により欠損する。SD-3と切り合い関係にあるが、先後関係については不明である。埋土は黒褐色～灰黄褐色砂質土である。

SK-58：調査区東区DT-66で検出した土壤である。深さ20cmを測る。西側は搅乱により欠損する。SD-3と切り合い関係にあるが、先後関係は不明である。埋土は暗褐色～にぶい黄褐色シルトで蹠をほとんど含まない。

SK-59：調査区東区DU-67で検出した土壤である。東西長約70cmで、北側は搅乱により欠損する。埋土は暗褐色砂質土で黒褐色シルトが多く含む。

SK-60：調査区東区DU-67で検出した土壤である。北側は搅乱により欠損しており、全形は不明。径50cm前後と想定される。埋土は暗褐色砂質土で黒褐色シルトのブロックを多く含む。

③その他の遺構

SK-32：調査区東区DQ-65・66で検出したSD-3もしくは別の溝からオーバーフローした河川運搬物のたまり状遺構である。埋土は灰黄褐色砂質土で黒褐色砂質土の径3～5mmの粒状ブロックをやや多く含む。径2～3mmの砂礫を多く含む。古墳時代後期の須恵器や土師器片が少量出土している。

(c) IV- 2層下部上面検出遺構（縄文時代晚期）(図4)

調査区東区の北東部ならびに東区南部に堆積するIV-1層を掘り下げた後、東区北東部ならびに東区・西区の南部で自然の谷地形を確認している。調査区南部で自然流路SR-103を検出している。

SR-103：調査区の南部DP～DS-60・61で検出した自然流路である。河幅は不明であるが、東区の南部地点が河の蛇行部にあたり、埋土中から縄文時代晚期後半に位置づけられる突帯文土器・石器に混じて獸齒骨や自然流木が多数出土している（写真30～33）。

以下はIV- 2層下部上面で検出した遺構とIV- 3層上面で検出した遺構である（写真34～37）。東区でIV- 2層下部掘り下げ後、IV- 3層上面で埋土が灰褐色シルトを基調とする柱穴などを多数検出した。しかし、調査区内の土層観察用畦における観察の結果、IV- 2層上部層中からの掘り込みであることが確認できた。東区に

続いて調査を行った西区では、IV- 2層下部上面で、灰褐色シルトの埋土を基調とする遺構を検出している。

①掘立柱建物（SB）

SB-501：SP-136、SP-214、SP-215は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、1m間隔で一直線に並ぶことから一連の遺構と考えられる。弥生時代以降の遺構である可能性がある。

SB-508：SP-14～SP-16・18は埋土の特徴（暗褐色～黒褐色）が共通し、1m間隔で一直線に並ぶことから一連の遺構と考えられる。弥生時代以降の遺構である可能性がある。

SB-522：SP-45、SP-47～49は埋土の特徴（暗褐色～黒褐色）が共通し、柱間1.5mで並ぶことから一連の遺構と考えられる。弥生時代以降の遺構である可能性がある。

SB-524：SP-42・43・52は埋土の特徴（暗褐色～黒褐色）が共通することから一連の遺構と考えられる。弥生時代以降の遺構である可能性がある。

②堅穴式住居あるいは平地式住居（SC）

以下は、発掘調査終了後の整理段階に、柱穴のみもしくは柱穴と中央土壙の配置等を基に、住居と想定できるものを可能な限り採り上げており、今後の整理により変更の可能性もある。また、住居に伴う掘り込みを確認できていないことから、堅穴式住居あるいは平地式住居の両者を想定しておく。

SC-502：SP-132・139・141・230は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。SK-138は中央土壙となる可能性が高い。

SC-503：SP-119・120・121（あるいは118）・124は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。

SC-504：SP-117・122・123は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。

SC-505：SP-26・27・28は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。SP-28・29の深度は浅いが、調査段階に掘りたりなかった可能性を考えておきたい。

SC-506：SP-64・111・113は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。

SC-507：SP-172・175・177・178・190は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構

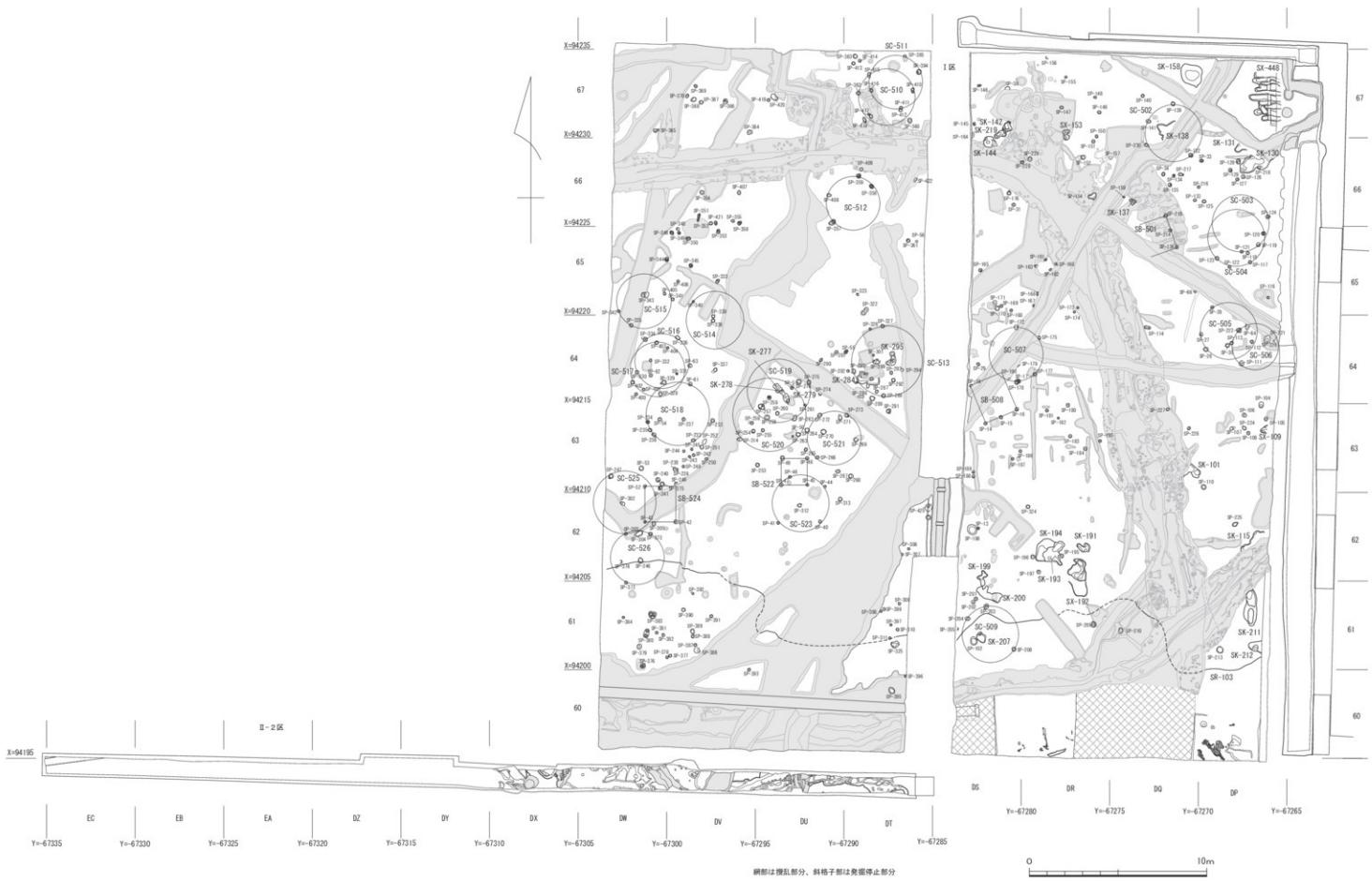


図4 01005調査(文京遺跡45次)IV-2層下部上面検出構全体図(縮尺1/200)

図4（折込）

裏

と考えられる。

SC-509 : SP-203・SP-204・SP-208は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。SP-102あるいはSK-207は中央部に位置することから、関連するものと考えられる。

SC-510 : SP-360・362・410・415・417は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。

SC-511 : SP-385・394・412・416は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。

SC-512 : SP-357・358・359・408は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。

SC-513 : SP-283・SP-288・SP-327は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。SK-295は中央部に位置することから、関連するものと考えられる。

SC-514 : 他の住居規模と共通し、埋土の特徴（灰黄褐色）も共通することから、SP-338あるいはSP-339を中心としてSP-340が一連の遺構であると想定しておく。

SC-515 : SP-335・SP-341・SP-342は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。SP-343は中央部に位置することから、関連するものと考えられる。

SC-516 : SP-63・330・334・336は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。

SC-517 : SP-328・402・403は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。

SC-518 : SP-61・233・236・329は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。

SC-519 : SP-258・262・275は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。SK-277・278・279は中央部に位置することから、関連するものと考えられる。

SC-520 : SP-261・263・314は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。SP-257は中央部に位置することから、関連するものと考えられる。

SC-521 : SP-264・266・269・272・273は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。

SC-523 : SP-40・41・44・46は埋土の特徴（暗褐色～黒褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。また、SP-312は配置的に柱穴となる可能性もあるが、埋土は灰黄褐色シルトで少し異なる。

SC-525 : 他の住居規模と共通し、埋土の特徴（灰黄褐色）も共通することから、SP-302を中心としてSP-247が一連の遺構であると想定しておく。

SC-526 : SP-303・SP-372・SP-373は埋土の特徴（灰黄褐色）が共通し、円形に並ぶことから一連の遺構と考えられる。SP-246は中央部に位置することから、関連するものと考えられる。

③小溝群

SX-448 : 東区北東部で検出している谷は、調査区の北東隅に向けて落ち込み、谷の落ち際の斜面では東西方向に列をなして平行にのびる幅30～40cm、深さ約5cmの小溝群が出土している。小溝群の埋土は何度か掘り返されていると同時に、溝同士で切り合い関係が見られることから、2～3回にわたって掘られたものと考えられる。特異な遺構のため性格については不明であるが、畠遺構の可能性も考えられる（写真22～29）。

④土壤

SK-101 : DP・DQ-63で検出した長辺80cm以上、幅40～75cmの不定形を呈する。深さ22cmの土壤。西側はSD-3によって切られる。埋土中には焼土塊のブロック・炭化物の小片が混じる。

SK-109 : DP-63、調査区東壁に接して検出した南北長90cm、東西長37cm以上を測る不定形の土壤。埋土は、灰褐色シルトで明黄褐色砂質土の丸いブロックを少量含む。

SK-115 : DP-62で検出した土壤。南側はSD-4によって切られる。埋土は灰黄褐色シルトで明黄褐色砂質土の丸いブロックが混じる。

SK-130 : DP-66で検出した長辺1.6m、幅70～80cm、深さ7cmの不定形の土壤。埋土は灰黄褐色シルトである。

SK-131 : DP-66で検出した長辺40cm以上、幅40cm前後、深さ12cmの不定形の土壤。

SK-137 : DQ-66で検出した不定形の小土壤である。

SK-142 : DS-67で検出した長辺約55cm、短辺約45cm、深さ26cmの不定形の土壌。埋土は明黄褐色シルト～砂質土。埋土中から焼土塊や炭化物片が出土している（写真41）。

SK-144 : DS-66・67で検出した径60～80cm、深さ79cmを測る不定形の土壌。住居の主柱穴となる可能性がある。埋土は浅黄色～灰黄褐色シルト。炭化物片や焼土塊を含む（写真40）。

SK-158 : DP・DQ-67で検出した平面1.1m×1.2mの隅丸方形気味、断面すり鉢状の土壌。Ⅲ層ならびにIV-1層を掘り下げた後、周辺に土壤層が広がることを確認した。当初谷部に形成された落ち込みと考えていたため、上部に存在した土壤層を約20cm掘り下げた後、遺構を検出した。検出後の深さは30cmであり、本来は50cm以上の深さと考えられる。埋土は灰黄褐色シルト～にぶい黄橙色シルトである。炭化物片に混じって下部から縄文時代晩期後半の土器片やサヌカイト剝片が出土している。

SK-191 : DR-62で検出した深さ13cmを測る不定形の土壌。埋土は灰黄褐色シルトで、明黄褐色シルトの丸いブロックを含む。

SK-192 : DR-61・62で検出した全長2.1m、幅約1m、深さ5cm前後の不定形土壌。埋土は灰黄褐色シルトで明黄褐色シルトの丸いブロックを含む。

SK-193 : DR-62で検出した長軸約140cm、幅80～100cm、深さ32cmの不定形の土壌。埋土にはにぶい黄褐色シルトで焼土塊が混じる。SK-194を切る。

SK-194 : DR-62で検出した長軸約140cm、幅約60cm、深さ2cmの不定形の土壌。埋土は灰黄褐色シルトである。SK-193に切られる。

SK-199 : DS-61・62で検出した深さ7cmの不定形の土壌である。埋土は灰黄褐色シルトで明黄褐色シルトのブロックが少量混じる。

SK-200 : DS-61で検出した不定形の土壌である。埋土は灰黄褐色シルトで明黄褐色シルトの径2～3mmの大粒状ブロックを多く含む。

SK-211 : DP-61で検出した長辺2m以上、幅70cm、深さ15cm以上の土壌である。IV-2層を掘り下げ、IV-3層上面で検出したため、本来の深さは15cmより深い。埋土にはにぶい黄褐色～黄褐色シルトで浅黄色シルトの不整形ブロックを多く含む。

SK-212 : DP-61で検出した東西検出長約70cm、幅70cm、深さ43cmの土壌である。埋土にはにぶい黄褐色シルト

で、下部は灰黄褐色～灰白色砂質土の不整形ブロックを含む。

SK-219 : DS-66・67で検出した長辺約60cm、幅約30cm、深さ49cmを測る不定形の土壌である。住居の柱穴である可能性がある。埋土は浅黄～灰黄褐色砂質土である。焼土塊・炭化物を含む（写真39）。

SK-277・SK-278・SK-279 : DU-63・64で検出した連結した不定形の土壌である。小穴が隣接している可能性がある。埋土は灰黄褐色シルトを主体として、浅黄色シルトのブロックが混じる。SC-519と関連する遺構である。

SK-284 : DT-64で検出した長軸約130cm、幅約70cm、深さ約40cmを測る不定形の土壌である。埋土は褐灰色土を主体として、焼土塊・炭化物片が混じる。

SK-295 : DT-64で検出した平面L字状の土壌である。最深部で46cmを測る。住居の主柱穴の可能性がある。埋土は灰黄褐色シルトで炭化物を含む。

(d) IV-3層以下で検出した遺構（縄文時代中期～晩期）（図5）

田石手川の堆積層であるV層上面に形成された凹凸面を埋める堆積過程の中で、遺構が営まれている。いずれの遺構も谷部の落ち際に形成されている。土器と共に伴している遺構はないが、IV-3層中から縄文時代中期の土器片が出土していることから、縄文時代中期から晩期にかけてIV-2層が形成される時間幅におさまる遺構である。

①土壌

SK-318 : DR-65で検出した長辺58cm、短辺41cmの不定形の土壌である。埋土は灰黄褐色シルトである。埋土中から1辺17cm、幅8cmの炭化木片が出土している（写真43）。

SK-319 : DR-65で検出した長軸1.4m、短軸95cmの不定形の土壌である。埋土は灰黄褐色シルトである。埋土中から5mm大の炭化物片を多く出土している（写真43・44）。

SK-320 : DR-65で検出した長軸74cm、短軸50cmの不定形土壌である。埋土はにぶい黄橙色シルトである。埋土中から炭化物片や礫が出土している（写真43）。

SK-371 : 調査区西区北西隅部DW-67で検出した土壌である。埋土は灰黄褐色シルトで、褐色シルトが混じりあう。遺構南側の掘り形の凹みに沿って東西方向に125cm、直径約16cmの炭化木が出土している。住居などの構造物の可能性も低く、埋土内から焼土塊

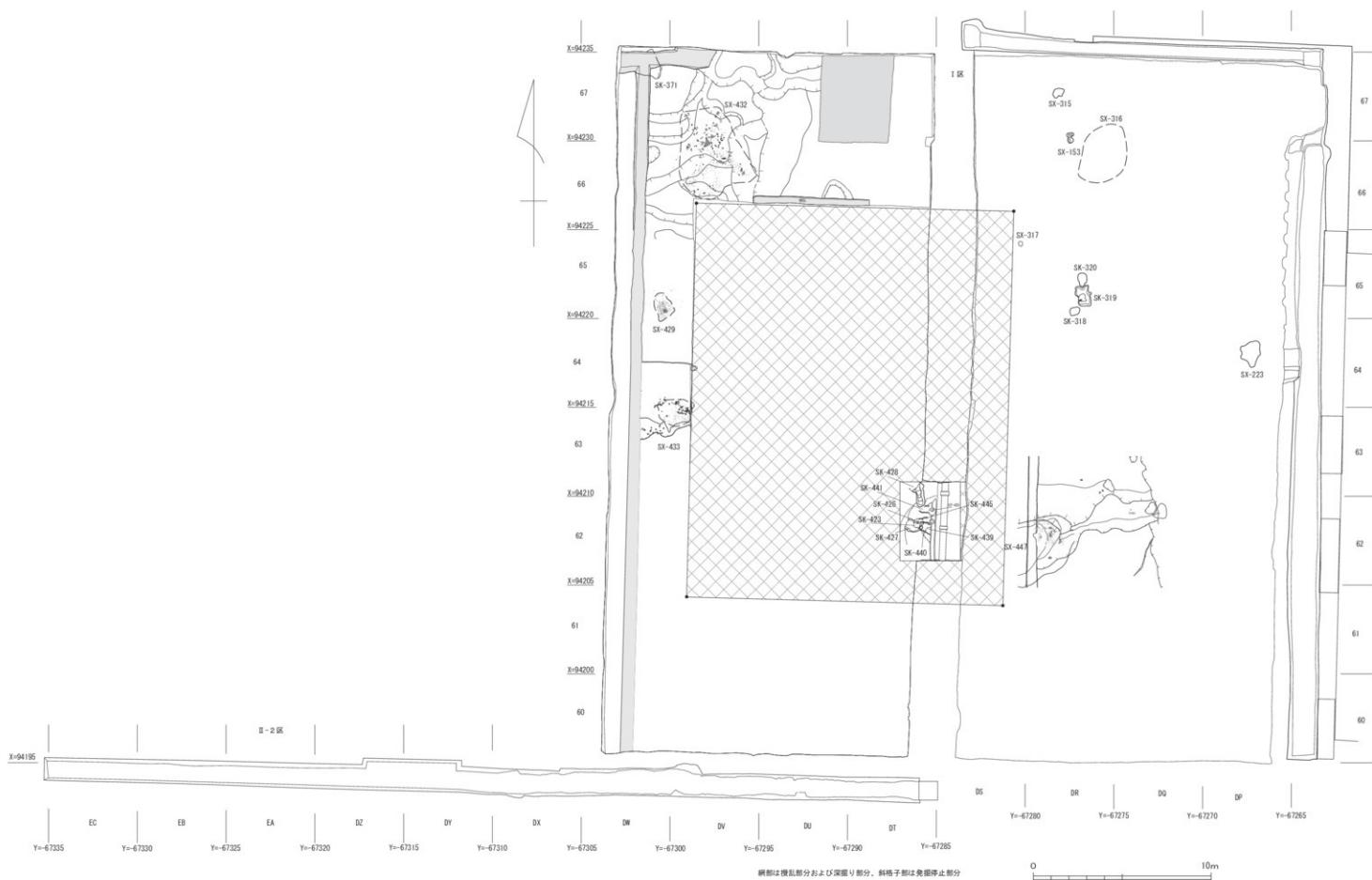


図5 01005調査(文京遺跡45次)IV-3層以下検出構全体図(縮尺1/200)

図5（折込）

裏

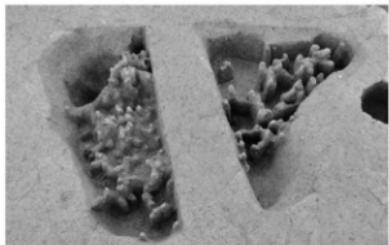


写真38 01005調査 SX-223遺物出土状況（西から）



写真39 01005調査 SK-219（南西から）

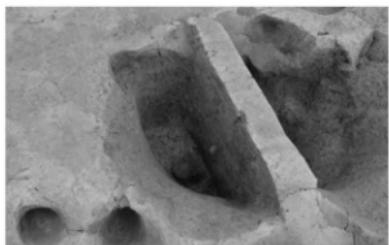


写真40 01005調査 SK-144（南西から）



写真41 01005調査 SK-142（東から）



写真42 01005調査 SX-316（北から）

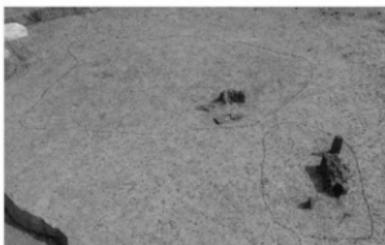


写真43 01005調査 SK-318・319・320検出状況（西から）



写真44 01005調査 SK-319遺物出土状況（西から）



写真45 01005調査 SX-447上部炭化物・焼土塊出土状況（北から）



写真46 01005調査 SK-371炭化木検出状況（西から）

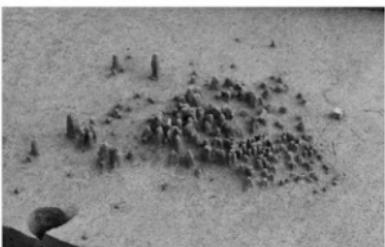


写真47 01005調査 SX-429炭化物・焼土塊出土状況（南西から）



写真48 01005調査 SX-429下部の状況（南西から）



写真49 01005調査 SX-432遺物出土状況（西から）



写真50 01005調査 SX-433遺物出土状況（西から）

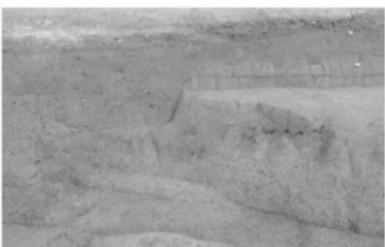


写真51 01005調査 SK-423・428検出状況（西から）



写真52 01005調査 SK-423遺物出土状況（北西から）



写真53 01005調査 SK-423遺物出土状況（南から）



写真54 01005調査 SK-428検出状況（西から）



写真55 01005調査 SK-427遺物出土状況（北から）



写真56 01005調査 SK-439遺物検出状況（東から）



写真57 01005調査 SK-440遺物出土状況（南から）



写真58 01005調査 SK-440完掘状況（西から）

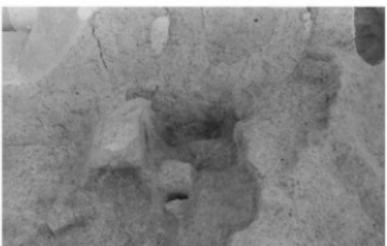


写真59 01005調査 SK-441完掘状況（西から）



写真60 01005調査 II-2区西侧完掘状況（東から）



写真61 01005調査 II-2区東側南壁（北西から）



写真62 01005調査 II-2区完掘状況（東から）



写真63 01005調査 II-2区東側完掘状況（西から）



写真64 01005調査 現地説明会の様子



写真65 01005調査 現地説明会の様子



写真66 01005調査 法文学部臨地講義の様子



写真67 01005調査 法文学部臨地講義の様子

も出土していないことから、残滓を捨てた廃棄穴と考えられる（写真46）。

SK-423：調査区中央部DT-62で検出した1辺（あるいは直径）50～60cmの土壌である。SK-427を切り込む。サヌカイトの板状石材が25点折り重なる状況で出土している。折り重ねられた石材間には炭化物や焼土塊などは見られない。土器は出土していない（写真51～53）。

SK-426：調査区中央部DT-62にて、SK-427の下部を掘り下げ中に確認した。検出面では、長径13cm、短径9cmの楕円形状の平面プランで、深さは約5cmである。本来は、SK-427を掘り込む可能性が高い。埋土内からは、サヌカイトの板状石材が1点出土している。埋土には炭化物片も含まない。

SK-427：調査区中央部DT-62、SK-423の下部で検出した長辺約90cm、幅約70cm、土壌である。土器は出土していない。直径10～15cm、長さ約70cmの炭化した木片が出土している。また埋土中からは炭化した木片の小片が大量に出土している（写真55）。

SK-428：調査区中央部DT-62・63で検出した長辺130cm、幅40～50cmの遺構である。埋土中に大量の焼土塊や炭化物が出土している。廃棄土壌と考えられる（写真51・54）。

SK-439：調査区中央部DT-62で検出した長径23cm、短径17cmの長楕円形の土壌である。深さは約10cmを測る。サヌカイトの板状石材2点が折り重なる状況で出土した（写真56）。

SK-440：調査区中央部DT-62で検出した幅1m前後の土壌である。全体の形状は不明である。埋土中には炭化物片や焼土塊を大量に混じる。土器は出土していない。なお埋土内から出土した9点のサヌカイト板状石材はいずれも新しい段階に掘り返されており、元位置を保つものではない（写真57・58）。

SK-441：調査区中央部DT-62で検出した幅90cm前後の土壌である。遺構側面ならびに底面は焼土面となつておらず、遺構内で何らかの焼成が行われていたと考えられる。SX-428に切られている。遺構の基盤層の中から縄文時代中期の土器片が出土しており、SK-441は縄文時代中期から晩期の遺構と考えられる（写真59）。

SK-445：調査区中央部DT-62で検出した土壌である。

SK-440の西側に設定した断割部の土層観察からSK-440に先行し、遺構の下部のみを検出したこと

を確認した。SK-445の下部には焼土塊が複数点在するので、周辺に同様の遺構が複数基存在していたと考えられる。

②その他の遺構

SX-223：DP-64で検出した長軸1.38m、短軸1.15mの範囲に広がる炭化物片の集中地点である。サヌカイト小剥片も混じる（写真38）。

SX-315：DR-67で検出した長軸80cm、短軸55cmの範囲に広がる炭化物の集中地点である。

SX-316：DQ・DR-66・67で検出した長軸1.7m、短軸1.3mの範囲に広がる土器・焼土塊・炭化物集中地点である。明確な掘り形が見られることから廃棄された残滓の集まりと考えられる（写真42）。

SX-317：DS-64で検出した径15cm前後の範囲に広がる焼土塊と少量の炭化物片の集中地点である。

SX-321：DR-64で検出した石の集中地点である。石は自然礫の可能性が高いことから、自然堆積の可能性を考えておく。

SX-429：DV・DW-64・65で検出した長軸70cm、幅50cmの範囲に広がる焼土塊・炭化物片の集中地点である（写真47・48）。

SX-432：DV-66・67で検出した長軸23m、幅1.9mの範囲に広がる焼土塊・炭化物片の集積地点である（写真49）。

SX-433：DV・DW-63・64で検出した焼土塊・炭化物片の集積地点である（写真50）。

SX-447：DR・DS-62、谷部の落ち際で検出した炭化物ならびに焼土塊の集中地点である（写真45）。

【II区の調査】

II区は既存配管の取替工事であるII-1区と新規配管設置ならびに新規橋設置工事分であるII-2区となる。

II-1区はすでに掘り返された部分であることから、掘り返し範囲の位置の測量ならびに写真撮影を行い、調査を終了した。

II-2区は東西約45m、幅1.4mの調査区である（写真60～63）。II-2区の区割りは、北西部を0として東へ5mまでを①区、5m～10mまでを②区、……、45m～50mまでを⑩区として遺物の取り上げなどを行った。文京遺跡全体の区割りとの対応関係では、①区はEC区、②区はEB区、……、⑨区はDU区、⑩区はDT区の東西区割りとはほぼ同じである。工事による掘

削深度である現地表下18mまで掘り下げを行った後、調査を終了した。④・⑤区、すなわちDZ・DY区では、雨天による地盤のゆるみから調査区壁が崩壊したため、土層断面図などを作成できなかった地点がある。II層直下、IV層上面で自然流路が2条出土している。I区で検出しているSR-1と同一の自然流路と考えられる。SR-451: DT・DU・DV59 (⑧~⑩区) で検出した自然流路である。埋土中から瓦器碗や繩文土器が出土している。

SR-452: DV ~ DZ・EA-59 (①~⑧区) で検出した自然流路である。埋土中から弥生土器・土師器・須恵器片や土師器皿などが出土している。

3.まとめ

今回の調査では、中世の自然河川1条、弥生時代～古墳時代の溝7条、縄文時代中期～晩期に堆積が進む基本層序IV層内で、住居跡や作業場跡と考えられる焼

土塊・炭化物の集中地点、サスカイト集積遺構、列をなして平行してびる小溝群が出土した。

作業場跡と考えられる焼土塊・炭化物の集中地点とサスカイト集積遺構は、縄文時代中期～晩期にかけて、河川堆積により微高地が南から北へ向かって形成される過程で旧河道への落ち際に営まれている。サスカイト集積遺構からは、香川県金山産と考えられるサスカイトの板状石材38点（計7743.75g）が出土している。微高地が形成された後、縄文時代晩期には20棟前後の住居跡が営まれる。列をなして平行してびる小溝群は、調査区東北側の旧河道への落ち際に位置し、幅30～40cm、深さ5cmを測る。縄文時代晩期の遺構としては特異なものであり、畠の可能性も考えられる。

以上のように、今回の調査では、文京遺跡における縄文時代中期～晩期の地形発達とともに、集落遺跡の展開を解明できる手がかりを得ることができた。

(三吉)

01101 (城北団地) 学内保育園改修工事に伴う発掘調査 (文京遺跡46次調査)

調査地点 松山市文京町3番 城北団地
調査面積 815m²
調査期間 2011年7月19日・8月3日
調査の種別 本格調査（小規模調査）
調査担当 田崎博之
調査補助 田中いづみ
依頼文書 施設基盤部長発事務連絡
(平成23年6月6日付)

とした。

7月11日、図6に示した発掘調査・立会調査・慎重工事の範囲が示された愛媛県教育委員会からの通知をうけ、施設基盤部の担当チームリーダー及び係員と、調査期間や作業員の勤員計画を作成し、7月14日には工事業者を含めた最終的な打ち合わせを行った。

発掘調査は、教育学部4号館南側の配管路部分である1区、北側の配管路部分である2区、西側のインターロッキング等の施工部分である3区、南西側のインターロッキング等の施工部分である4区、建物南側の砂場・フェンス基礎部分である5区に分けて進めることとした。発掘調査の通知が松山市教育委員会から送られてきた後の7月19日に、先行して1・2区の調査を行い、3～5区は8月3日に調査を実施した。なお、5区のフェンス基礎部分については、発掘調査の都合上、幅80cmの溝状に調査区を設定した（図6・7）。

1. 調査にいたる経緯と調査経過

2011年6月6日、施設基盤部長発の事務連絡で、教育学部4号館1階西側に学内保育園を設置するため、建物改修工事に伴う発掘調査の依頼があった。当日、施設基盤部のチームリーダー・係員と協議を行い、できるだけ工事に伴う掘削の深度を浅くすることを依頼するとともに、松山市教育委員会・愛媛県教育委員会に提出する土木工事届に添付する意見書を作成するこ

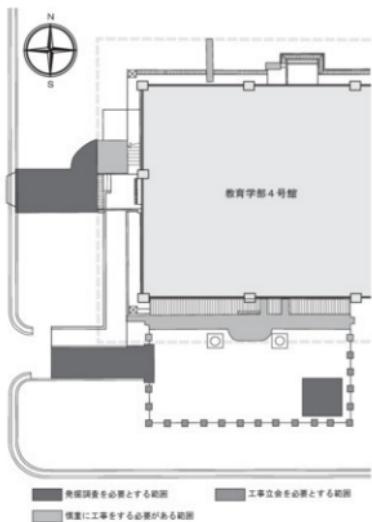


図6 01101調査（文京遺跡46次）愛媛県教育委員会から
の通知の調査範囲

2. 調査の記録

1区は、教育学部4号館の建物南側に接して配管を埋設する計画で、工事による掘削深度は現地表下40cmまでである。調査に着手し、重機を用いて予定されていた掘削深度まで掘り下げたが、造成土である基本層序I層が続く。現地表下40cm以上を掘削することがないので、1区の調査を終了することとした（写真68～70）。

2区は、建物北側の配管路部分である。重機で現地表下65cmまで掘り下げたが、造成土である基本層序I層が続く。予定されていた工事に伴う掘削深度が65cmであるので、この時点での2区の調査を終了した（図7-②、写真71～73）。

3区は、建物西側のインターロッキング等の施工部分である。重機で工事に伴う掘削深度である現地表下20cmまで掘り下げたが、造成土である基本層序I層が続く。この時点で3区の調査を終了した（図7-③・④、写真74・75）。

4区は、建物南西側に施工されるインターロッキング部分である。重機で工事に伴う掘削深度である現地表下20cmまで掘り下げたが、造成土である基本層序I

層が続く。4区でも、この時点での調査を終了することとした（図7-⑤・⑥、写真76）。

5区は建物南側の砂場・フェンス基礎部分である。東側から重機で造成土である基本層序I層を掘り下げたところ、5区西半部では、現地表下35cm前後で、団地造成前の水田層である基本層序II層があらわれた。II層は、砂礫混じりの灰色シルト土で、厚さ10～20cmを測る。II層直下の現地表下48～50cmで径3～7cmの亜円礫が多く混じる黒褐色砂礫土層があらわれた。5区から東へ100mほど離れた文京遺跡42次調査第3工区の調査でも同様の黒褐色砂礫土層があらわれ、弥生時代後期後半の土器が比較的多く出土している。5区の黒褐色砂礫土層も一連の堆積土層と考えられる。これに対して、5区東半部では、基本層序II層は削平されており、現地表下43～55cmで黒褐色砂礫土層があらわれた。

この黒褐色砂礫土層の上面を精査したが、東端部を除いて遺物は出土しなかった。一方、東端部では土器棺墓SQ-1が出土した。黒褐色砂礫土層の上面では墓壙の掘り形が明確でなかったので、黒褐色砂礫土層の下面まで掘り下げたところ、灰白色砂礫層があらわれ、ようやく掘り形を確認できた。しかし、狭い調査範囲のため、墓壙の規模や形状は明らかにできなかった。壙棺は南東方向に棺を傾かせて埋葬されている。壙の胸部中位以上を打ち欠いた上棺で、壙の頭部の付け根以上を打ち欠いた下棺を覆う（図7-①、写真79～84）。

上棺に用いられた壙は、球形の胴部となるものと考えられ、凸レンズ状の底部をもつ（図8-2）。外面は平行条線のたたき目を刷毛目調整で消し、部分的にミガキ調整を加える。下棺に用いられた壙は、球形の胴部にラッパ状に短く開く口頭部がつく（図8-3）。口頭部の破片は棺外から出土しており、目張りに用いたものと考える。底部は、発掘時に凸レンズ状の底部であること確認できたが、焼成不良のため、洗浄中に底部が土塊になって崩れてしまい復元できなかった。口頭部は刷毛目調整の後に、口縁部周辺と頭部の付け根に横ナデ調整を施す。胴部外面は平行条線のたたき目を刷毛目調整で消し、ミガキ調整を加える。内面は刷毛目調整の後に、部分的に縱方向のナデ調整を施す。さらに、上棺・下棺と別個体の胴部中位の大形破片が出土している（図8-1）。下棺の壙の口頭部破片と同じく、目張りに用いられた破片と考えられる。以上の上・下棺に用いられた壙は形態的な特徴から、弥生時

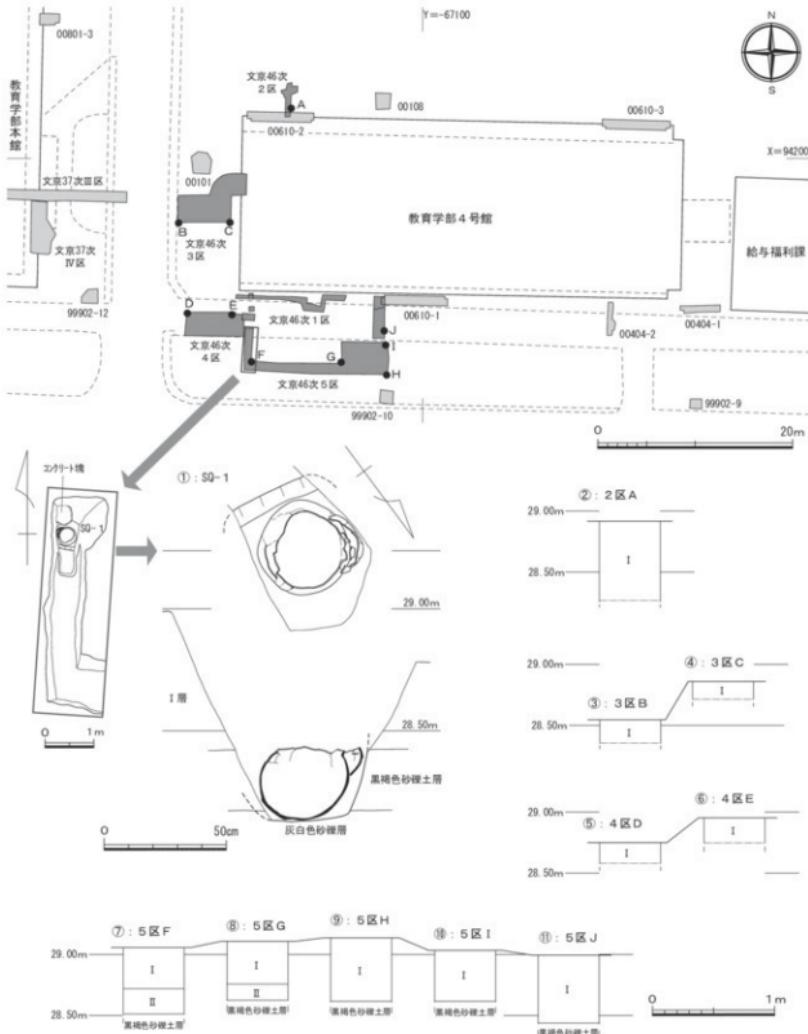


図7 01101調査(文京道路46次)地点位置図(縮尺1/500)、SQ-1実測図(縮尺1/100-1/20)、土層柱状図(縮尺1/40)



写真68 01101調査 1区位置（南西から）



写真70 01101調査 1区東端部（南東から）



写真69 01101調査 1区西端部（東から）



写真71 01101調査 2区位置（北から）



写真72 01101調査 2区全景（北西から）



写真73 01101調査 2区土層断面（北西から）



写真74 01101調査 3区全景（西から）



写真75 01101調査 3区南西部掘り下げ状況（北西から）



写真76 01101調査 4区全景（北東から）



写真77 01101調査 5区全景（北東から）



写真78 01101調査 5区東半部（北から）



写真79 01101調査 SQ-1検出状況（南から）



写真80 01101調査 SQ-1調査状況（北西から）



写真81 01101調査 5区西部SQ-1出土状況（南から）



写真82 01101調査 SQ-1出土状況（北東から）



写真83 01101調査 SQ-1墓壙完掘状況（西から）



写真84 01101調査 SQ-1完掘状況（北東から）

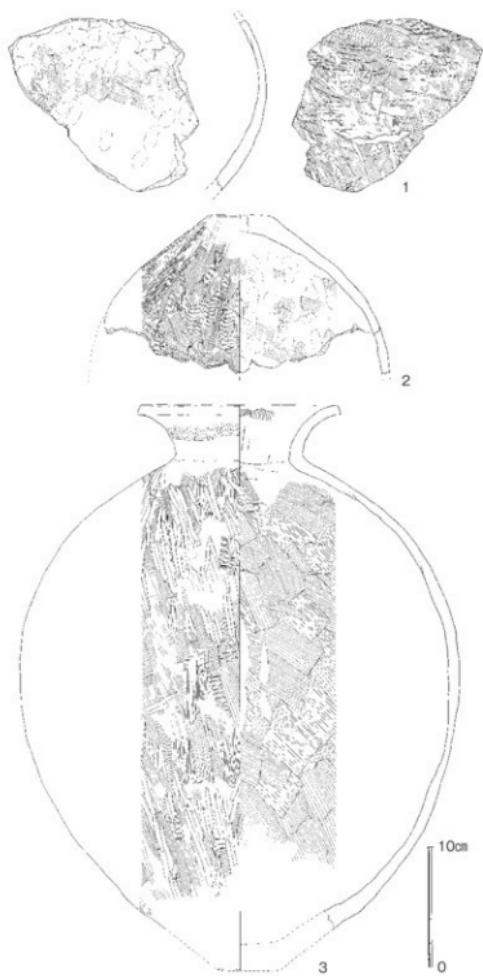


図8 01101調査（文京遺跡46次）SQ-1遺物実測図（縮尺1/4）

代後期後葉に比定できる。

以上、5区では、東端部で土器棺墓SQ-1を調査したが、予定されていた工事に伴う掘削深度が50cmであり、これ以上掘り下げを行わないので、この時点で5区の調査を終了することとした（図7-⑦～⑪、写真77・78）。

3. 調査のまとめ

今回の1～4区の調査では、工事による掘削が造成土である基本層序I層の中に収まり、道構・遺物が破壊されることがないことを確認の上で、現状保存を図ることとした。5区では、予定されていた掘削が、土器棺墓SQ-1が出土した黒褐色砂礫土層の上面までにとどまっている。工事によって黒褐色砂礫土層が掘り下げられないことを確認の上で、5区では土器棺墓SQ-1の調査を行うにとどめ、道構の現状保存を図ることとした。

今回、5区東端部で土器棺墓SQ-1の調査を行うことができた。これまでの文京遺跡における発掘調査では集落関連の道構は数多く出土しているが、墓の調査は初めてである。松山平野では、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭に10基前後の土器棺墓が群集して営まれる事例が知られている。5区周辺に当該期の墓域が広がっていることが考えられる。その点が、今回の発掘調査の大きな成果である。（田崎）

01102（城北団地）旧教育学生支援部事務室改修工事に伴う発掘調査 (文京遺跡47次調査)

調査地点 松山市文京町3番 城北団地
調査面積 33.1m²
調査期間 2011年8月18日・9月6日
調査の種別 本格調査（小規模調査）
調査担当 田崎博之
調査補助 田中いづみ
依頼文書 施設基盤部長発事務連絡
(平成23年6月6日付)

1. 調査にいたる経緯と調査経過

2011年6月6日、施設基盤部長発の事務連絡で、旧教育学生支援部事務室の建物改修工事のための発掘調査の依頼があった。施設基盤部のチームリーダー・係員と協議を行い、できるだけ工事に伴う掘削の深度を

浅くすることを依頼するとともに、松山市教育委員会・愛媛県教育委員会に提出する土木工事届に添付する意見書を作成することとした。

7月1日、愛媛県教育委員会からの通知をうけ、施設基盤部の担当チームリーダー及び係員と調査期間や作業員の勤員計画を作成し、7月7日には工事業者を含めた最終的な打ち合わせを行った。工事による掘削深度は現地表下20~40cmと浅く、工事地点が建物建設に伴う余掘り範囲に収まる可能性が高いが、既往の調査では周辺に弥生時代後期の遺物包含層が確認されているので、文京遺跡47次調査として発掘調査を実施することとした。

発掘調査は、ポーチ、スロープ撤去及びSUSノンスリップグレーティング施工が行われる建物南西側の1

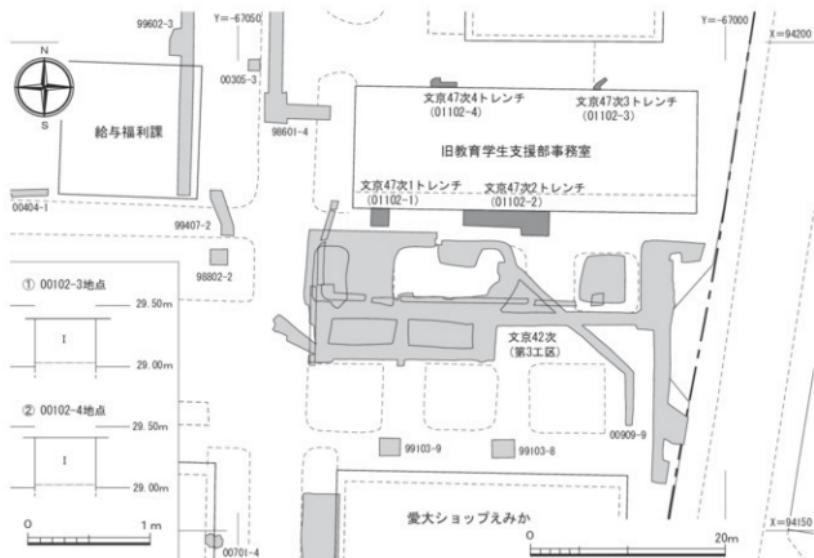


図9 01102調査（文京遺跡47次） 地点位置図（縮尺1/500）および3・4地点土層柱状図（縮尺1/40）



写真85 01102調査 1地点全景（南東から）



写真86 01102調査 1地点土層確認状況



写真87 01102調査 2地点全景（西から）



写真88 01102調査 2地点土層確認状況



写真89 01102調査 3地点遠景（東から）



写真90 01102調査 3地点土層確認状況



写真91 01102調査 4地点全景（北東から）



写真92 01102調査 4地点土層確認状況

地点と建物南側中央の2地点、北東側における埋設管が施工される3地点、北西側の配管更新に伴って掘削工事される4地点に分け、1・2地点は8月18日、3・4地点は9月6日に調査を実施した（図9）。

2. 調査の記録

1・2地点では、現地表下20cmでポーチ・スロープが撤去されたが、ともに工事に伴う掘削は表土層の範囲に収まっている（写真85～88）。現地表下20cm以上を掘削することがないので、調査を終了することとした。

3・4区は、建物沿いに当たり、現地表下45cmまで掘り下げたが、ともに表土層の範囲に収まっている（図9、写真89～92）。予定されていた工事に伴う掘削深度が現地表下45cmであり、この時点で調査を終了した。

3. 調査のまとめ

今回の1～4地点の調査では、工事による掘削が造成土である基本層I層の中に収まり、構造・遺物が破壊されることがないことを確認した。（田崎）

01103（城北団地）教育学部4号館プレイルーム等改修工事に伴う 発掘調査（文京遺跡48次調査）

調査地點 松山市文京町3番 城北団地内
調査面積 1425m²
調査期間 2011年10月22日～10月26日
調査の種別 本格調査（小規模調査）
調査担当 田崎博之
調査補助 田中いづみ
依頼文書 施設基盤部長発事務連絡
(平成23年9月8日付)

1. 調査にいたる経緯と調査経過

2011年9月8日、施設基盤部長発の事務連絡で、教育学部4号館に設置されるプレイルーム等の改修工事計画に伴う発掘調査の依頼があった。早速、施設基盤部のチームリーダー・係員と協議を行い、できるだけ工事に伴う掘削の深度を浅くすることを依頼するとともに、松山市教育委員会・愛媛県教育委員会に提出する土木工事届に添付する意見書を作成した。

10月12日、発掘調査・立会調査・慎重工事の範囲が示された愛媛県教育委員会からの通知をうけ（図10）、施設基盤部と調査期間や作業員の動員計画を作成し、さらに工事業者を含めた最終的な打ち合わせを行った。

発掘調査は、教育学部4号館南東端から南側の道路までの範囲と、工事に伴って移植が必要となった樹木の移植先である。（図11）。

2. 調査の記録



図10 01103調査（文京遺跡48次）愛媛県教育委員会からの通知の調査範囲

1区は、教育学部4号館南東角から南側の道路までの範囲に当たる（写真93～95）。工事に伴う根切り面



写真93 01103調査 1区北半部全景（北側上方から）



写真94 01103調査 1区北半部全景及び深掘り部分（南東から）



写真95 01103調査 1区北半部深掘り部分土層断面（南東から）



写真96 01103調査 2・3区遠景（北西上方から）



写真97 01103調査 2区全景（南から）



写真98 01103調査 2区土層断面（南西から）



写真99 01103調査 3区全景（北西から）



写真100 01103調査 3区土層断面（北から）

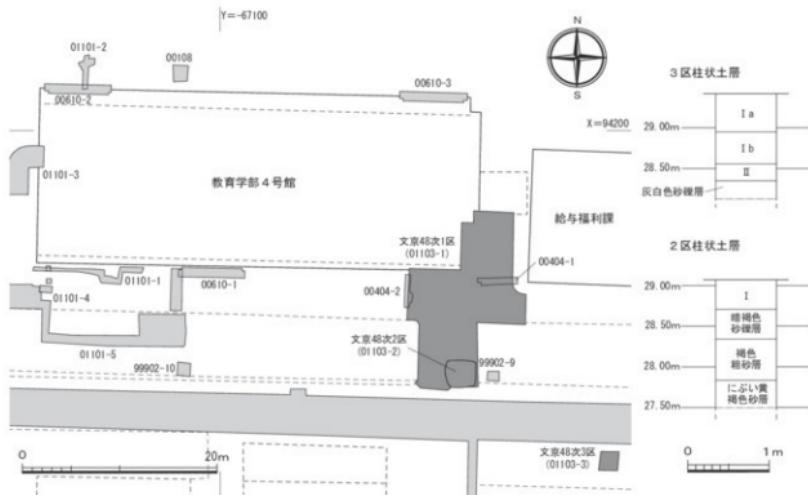


図11 01103調査(文京遺跡48次) 地点位置図(縮尺1/500)および2・3区土層柱状図(縮尺1/60)

である現地表下20cmまで掘り下げたが、造成土である表土I層が続く。予定されていた工事に伴う掘削深度は現地表下30cmまであり、この時点で1区の調査を終了することとしたが、確認のために、教育学部4号館東端に沿って溝状に深掘りを行った。その結果、現地表下60cmで、径1～5cmの円礫が多く混じる粗砂～極粗砂からなる黒褐色～褐色の砂層を確認できた。後述する2区の褐色砂層に対応する土層である。

2区は1区の南東隅の工事で移植が必要となった樹木の周辺である(写真96～98)。現地表下31cmで、基本層序II層はみられず、暗褐色砂礫土層があらわれた。径1～5cmの円礫が多く混じり、弥生土器の胴部小片が点々と出土する。その下部には、現地表下57cmで径1～5cmの円礫が多く混じる粗砂～極粗砂からなる褐色砂層、71cmで粗砂～極粗砂を主体として中砂が若干混じるにぶい黄褐色砂層があらわれた。褐色砂層とにぶい黄褐色砂層からは、遺物は出土していない。

3区は2区から16mほど南東側に離れた樹木の移植先である(写真96・99・100)。現地表下48cmまで造成土の表土I層がつづく。その下層には、厚さ33cmの灰

黄褐色の砂混じりシルト土層が堆積する。下部には5cmほどの厚さでマンガンが沈着する。基本層序のII層に当たる圃地造成以前の水田層である。さらに下部の現地表下104cmで灰白色砂礫層があらわれた。径1～5cm及び拳大の円礫が混じる粗砂～極粗砂からなる。西に50mほど離れた文京遺跡46次調査地点5区で、弥生時代後期～古墳時代の遺物を包含する黒褐色砂礫土層の下部で確認できた灰褐色砂礫層に対応する河川堆積物と考えられ、遺物は出土していない。

3. 調査のまとめ

今回の調査では、30mほど東側に離れた文京遺跡42次調査と、西側の46次調査で確認された旧河道上部に形成された弥生時代後期の遺物を包含する黒褐色～褐色の砂礫土層を確認できた。今回の調査で出土した遺物は、弥生土器の胴部小片が少量しかないが、一連の土層と考えられる。また、黒褐色～褐色の砂礫土層の広がりを参考とすれば、今回の調査地点周辺では、ほぼ東西方向に旧河道がのびていることを推定できる。

(田崎)

01105 (持田団地) 附属小学校プール改修工事に伴う発掘調査
(持田遺跡4次調査)

調査地点 松山市持田一丁目860番 持田団地
調査面積 20.8m²
調査期間 2012年3月2日
調査の種別 本格調査（小規模調査）

調査担当 田崎博之
調査補助 田中いづみ・宮崎直栄
依頼文書 施設基盤部長発事務連絡
(平成23年12月13日付)

1. 調査にいたる経緯と調査経過

2011（平成23）年12月13日、施設基盤部長発の事務連絡で、持田団地附属小学校プール改修工事について報告があった。当日、施設基盤部との協議を行い、できるだけ工事に伴う掘削の深度を浅くすることを依頼するとともに、松山市教育委員会・愛媛県教育委員会に提出する土木工事届に添付する意見書を作成することとした。

2012（平成24）年1月12日、発掘調査・立会調査・慎重工事の範囲が示された愛媛県教育委員会からの通知をうけ、発掘調査届を提出するとともに、施設基盤部・工事業者と調査にかかるる協議を行い、3月2日に調査を実施した。また、立会調査の必要な範囲である、更衣室改修工事（写真101・102）と電柱支線基礎工事（写真103）に伴う立会調査を2月3日、更衣室北側の土間新営工事（写真104）とプール北側の排水管設置工事（写真105・106）に伴う立会調査を2月15日に実施した。発掘調査は、フェンス基礎が設置される範囲を南から1～9トレンチとして実施した（図

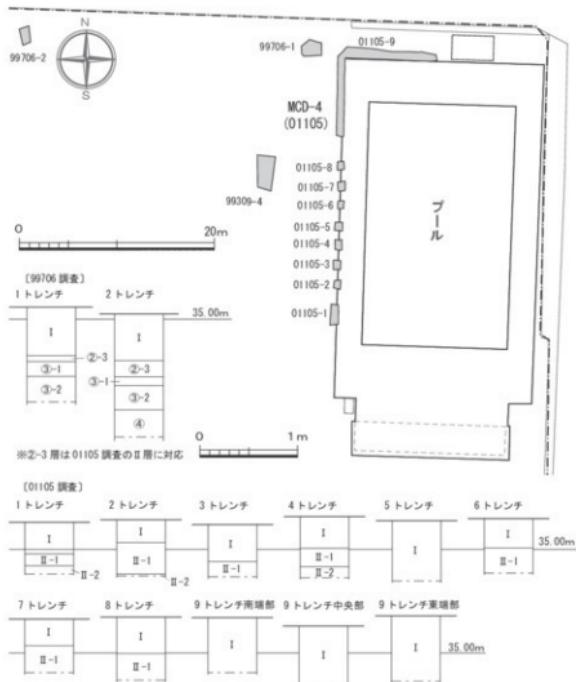


図12 01105調査(持田遺跡4次) 地点位置図(縮尺1/500)および土層柱状図(縮尺1/50)

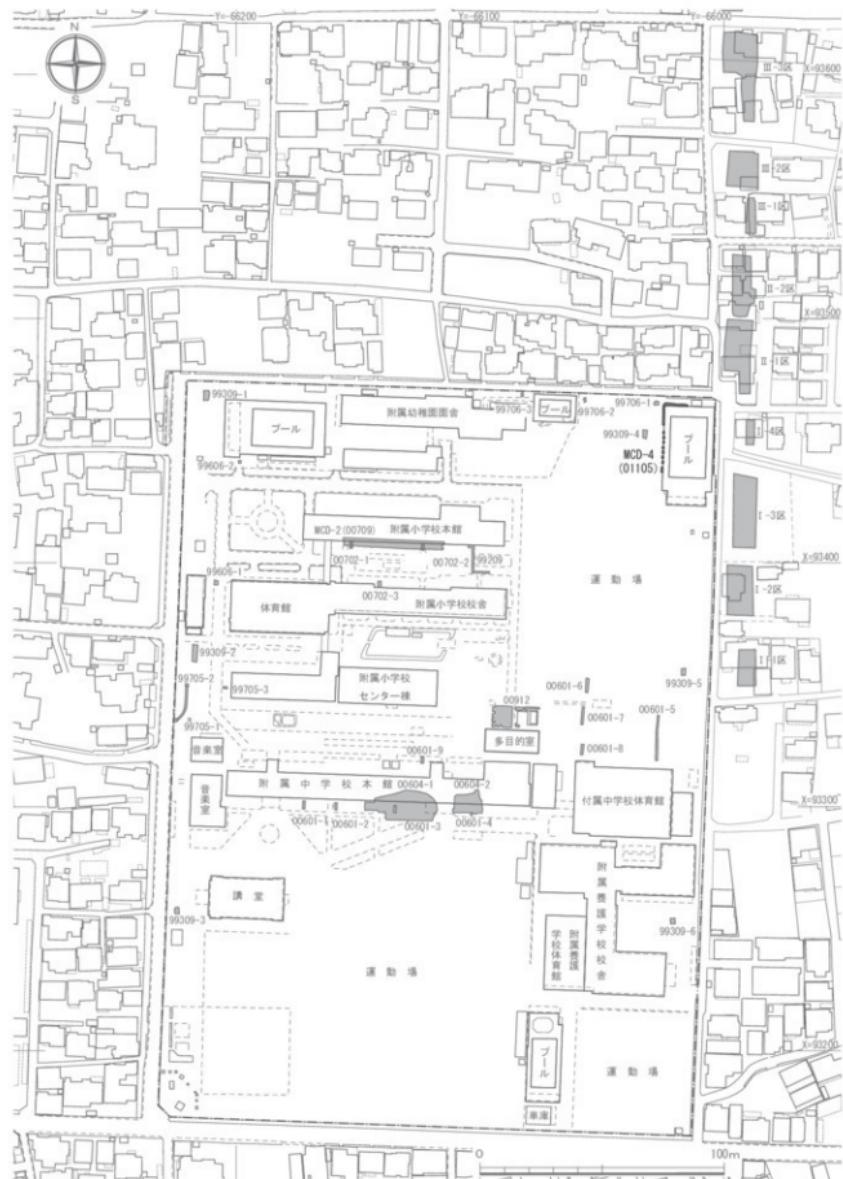


図13 01105調査(持田遭難4次)地点位置図(縮尺1/2,000)



写真101 01105調査 更衣室改修工事立会調査



写真102 01105調査 更衣室改修配管設置立会調査



写真103 01105調査 電柱支線基礎立会調査



写真104 01105調査 更衣室北側土間立会調査



写真105 01105調査 プール北側排水管工事立会調査(西から)



写真106 01105調査 プール北側排水管路東端部出土の石垣
(西から)



写真107 01105調査 調査区南半部全景（北西から）



写真108 01105調査 1・2トレンチ全景（北から）



写真109 01105調査 1トレンチ土層



写真110 01105調査 2トレンチ土層



写真111 01105調査 調査区北半部全景（西から）



写真112 01105調査 9トレンチ南端部土層



写真113 01105調査 9トレンチ北側土層（東から）

12)。

2. 調査の記録

立会調査では、掘削深度がいずれも造成土である表土層Ⅰ層の中に収まることを確認できたが、ブル北側の排水管路東端では面取された切石の石組みがあらわれた。切石の状況から近代以降の用水路に伴う石組みと考えられる（写真106）。

フェンス基礎工事に伴う発掘調査では、工事に伴う根切り面まで掘り下げたが、いずれの地点も、造成土である表土層Ⅰ層あるいは圃地造成以前の近世の水田層であるⅡ層の中に収まることを確認できた（図13）。Ⅱ-1層は水田耕作土層で、灰褐色の極粗砂・粗砂を主体とする砂質土である。Ⅱ-2層は水田床土層。にぶい黄褐色のシルト混じり砂質土で、マンガン、鉄が沈着

している。

いずれの地点でも遺物は出土していない。

3. 調査のまとめ

周辺の99706調査1・2トレーナーにおいては、造成土の表土層Ⅰ層及び近代造構の水田層である②-3層（今回調査のⅡ層に対応）の下層では、標高34.40～34.60mで中世～近世の水田層（③-1・2層）、34.08mで灰黄褐色砂質土の砂礫層の④層が確認されている（図13）。④層は既往の調査から弥生時代～古墳時代の遺物を包含する。今回の工事に伴う掘削は、標高34.70～34.75mまである。そのため、Ⅱ層下の埋蔵文化財は破壊されないことから現状保存を図ることができる。その旨を施設基盤部と工事業者に伝え、発掘調査を終わることとした。（田崎）

III 愛媛大学附属図書館所蔵の『鈴木栄一郎・西田栄資料』の受け入れについて

1. 資料受け入れの経緯

愛媛大学附属図書館には、かつてロビー等に考古資料が展示されていた。しかし、2007年に附属図書館建物耐震補強工事が行われ、2008年度から図書館1階に教育・学生支援機構が配置された結果、図書館スペースの再配置の中で考古資料展示は除かれ、資料が収蔵庫へと収納されるに至った。

資料を展示していた当時より、図書館では考古資料の正確な評価と活用を自ら行えない状況から、調査室への資料の詳細調査さらには引き取りを度々打診していた。それが展示自体も行えない状況に到り、かつ大学内にミュージアムが設置されたこともあり、2010年3月中旬に、図書館課長より改めてミュージアムおよび調査室に、資料調査の依頼がなされた。これを承けて調査室では、2010年3月18日に資料内容の確認を行った。

資料は、1点ずつ図書カードを用いた資料カードが作成され、この番号に従って管理収納されていた。石器8点(001～008、ただし008は所在不明)、縄文土器15点(101～115)、弥生土器・土師器15点(201～215)、須恵器・新羅土器35点(301～335)、埴輪1点(336)と分類別に、合計74点(うち1点所在不明)である。収納は段ボール5箱とブリキ製長持2箱になされ(写真114)、各個体はエアーケッショングリーンに梱包されていた(写真115)。資料カードが資料とともに梱包されていたものとそうでないものが混在していたが、全資料カードのコピーが図書館から提供され、現



写真114 資料保管状況1

時点図書館での資料整理内容を確認することができた。資料の梱包を解き、これらの整理内容を確認するとともに、写真撮影を行い、後日エクセルデータとしてカード化を図った。

同時に、図書館から提供された資料により、以下の内容が示された。すなわち、「資料の大部分は、旧制松山高等学校鈴木栄一郎教授によって、大正末期より昭和初期にかけて収集されたものであるが、愛媛大学教養部西田栄教授により収集されたものも一部含まれている。松山高等学校時代には同校図書館に保管されていたが、愛媛大学発足後は附属図書館に保管され、昭和43年4月、文理学部改組の際教養部人文資料室に移され、更に昭和54年5月、人文資料室より附属図書館に移された。」とのことである。

以上のような資料内容を確認し、後日整理した内容を図書館に報告すると、附属図書館からは、自ら十分な活用を図れない現状においては、埋蔵文化財調査室あるいはミュージアムに早期に資料を引き渡したいとの要望が再度示された。埋蔵文化財調査室では、既に旧歴史学研究会保管資料を受け入れたように、大学内所蔵・保管の考古資料について積極的に保管・活用を図るようしているところである。ミュージアムでの展示・活用も、その具体的の方策としてあり得るが、まずは資料の収蔵と整理を埋蔵文化財調査室において行う必要があった。しかし、図書館からの要望が伝えられた2010年度中は、前年度本格調査3件を並行して行っていたため、埋蔵文化財調査室に資料の引き取りス



写真115 資料保管状況2

ベースがなく、要望に応えられる状況になかった。この間にも附属図書館からは度々引き渡しの要望が伝えられていたが、これら調査の整理がある程度進行した2011年度になって初めて、引き取りに向けて具体的調整を進めることができるようにになった。

その結果、2011年7月8日付けで附属図書館長発埋蔵文化財調査室長宛の、「図書館中央館において所蔵している考古資料について(依頼)」の文書を受け取り、2011年7月15日付けで、埋蔵文化財調査室長発附属図書館長宛「図書館中央館において所蔵している考古資料について(回答)」で、埋蔵文化財調査室での資料の整理・保管・活用を囲っていくことを回答した。なお、実際の資料の移動にはさらに時間を要し、図書館から埋蔵文化財調査室へ資料移動は9月5日となった。

2. 資料の整理

既に記したように、移管した資料は、所在不明の1点を含めて74点。附属図書館で3けたの整理番号が付され、多くの資料には、その番号が鉛筆注記されたドラフティングテープが貼られていた。これらは昭和54年に図書館に移管されて以降、それまでの西田栄氏の整理を元に図書館において付された整理番号と見られ、それ以前の整理番号(74-20等)も図書館作成資料カードに転記されていた。一方、資料によれば、本体に墨あるいはマジック等で直接注記されたもの、ラベルが付されたものなどがあったが、これらは全資料に一貫したものではない。

以上のような、調査室受け入れ段階での整理状況、および多様な出土地からなる資料群という性格から、附属図書館旧蔵資料として、図書館において作成された整理番号を調査室でも踏襲することとし、これに愛媛大学附属図書館を示す「E U L」を冠して、「E U L-301」等として、本体に注記した。なお、埋蔵文化財調査室受け入れ資料としては、コレクション番号「C-5」が付与されることになる。

既に写真撮影して資料カードも作成していたことから、調査室では、まず資料の破損状況や注記・ラベルなどの状態を確認した。すると、資料本体への注記が、洗浄後も含めて新たに確認できた。また、注記以外の整理状況として、最も古い整理によるものとみられるラベル添付が多くの資料で認められた。ただそのラベル上には、図書館整理の3けたの番号が鉛筆注記されたドラフティングテープが貼られており、これらは本体注記で替えられることから、ドラフティングテープを除去して旧ラベル上の注記確認に努めたが、ほとんど叶わなかった。以上のような内容を改めて台帳に留めた上で、注記作業に先立ち、長年のホコリ等の洗浄を行った。なおこの際に新たに本体注記が確認された資料もあった。そして、各個体に新たに注記を施し、一部の接合補修を行うなどし、調査室コンテナに収納し直した。結果、資料はコンテナ10箱に収まった。現時点での資料の詳細は、表5に掲られたい。今後、実測図の作成など、より詳細な資料整理に進む予定である。

(吉田)

表5 図書館日蔵資料一覧

登録番号	管理番号	新	旧	名種	時代	出土所	法量	カド	記述	現況	付箋	注記	本体	種別	遺物	部位	コチナ番号	出土地	図書館整理	
C-5 EUL 001	7.4-1			磨製石斧						複数										
C-5 EUL 002	7.4-2			块状石斧						複数										
C-5 EUL 003	7.4-3		(7)	石核(後端)						複数										
C-5 EUL 004	7.4-4			磨製石斧						複数										
C-5 EUL 005	7.4-5			磨製石斧						複数										
C-5 EUL 006	7.4-6		(7)	磨製石器						複数										
C-5 EUL 007	7.4-7			石核(?)						複数										
C-5 EUL 008	7.4-8		(7)	石核(?)						複数										
C-5 EUL 101	7.4-9			縄文土器						複数										
C-5 EUL 102	7.4-10			縄文土器						複数										
C-5 EUL 103	7.4-11			縄文土器						複数										
C-5 EUL 104	7.4-12			縄文土器						複数										
C-5 EUL 105	7.4-13			縄文土器						複数										
C-5 EUL 106	7.4-14			縄文土器						複数										
C-5 EUL 107	7.4-15			縄文式(中)						複数										
C-5 EUL 108	7.4-16			縄文式(中)						複数										
C-5 EUL 109	7.4-17			縄文式(中)						複数										
C-5 EUL 110	7.4-18			縄文式(中)						複数										
C-5 EUL 111	7.4-19			縄文式(中)						複数										

団書館新規												
収蔵番号	管理番号	所	旧	器種	時代	出土地	法量	カード	本体	付箋	通物	
									種別	経緯	コマナ 備考	
C-5 EUL 112	74 - 2 - 0	縄文式(中 陶土器片)	美詳	長径(9.5cm)	山田口遺跡、船形文(?)。			陶文土器	陶文土器	口縁部	1 日本高保値	
C-5 EUL 113	74 - 2 - 1	縄文式(中 土器片)	美詳	長径(7.0cm)	船形文(?)。			陶文土器	陶文土器	脚部	1 日本高保値	
C-5 EUL 114	74 - 2 - 2	縄文式(中 土器片)	美詳	長径(8.0cm)	萬葉物語の鉢土器。口縁部に横文あり。昭62(?) 考古学的発掘調査で出土。その上部表面には縦溝が多く、深井状の溝であるが、車輪印C と呼ばれるものがある。また、縦溝の内側には、人字縞模様がある。 縦溝の脇合の位置は斜め舟形土器に至り、から			縄文土器	縄文土器	脚部	1 日本高保値	
C-5 EUL 115	74 - 2 - 3	縄文式土器 (陶器品)	南宇和郡御前 町平野原宿	高径(9.2cm)	萬葉物語の鉢土器。口縁部に横文あり。昭62(?) 考古学的発掘調査で出土。その上部表面には縦溝が多く、深井状の溝であるが、車輪印C と呼ばれるものがある。また、縦溝の内側には、人字縞模様がある。 縦溝の脇合の位置は斜め舟形土器に至り、から			縄文土器	縄文土器	全形	1 宮内省平城宮	
C-5 EUL 201	74 - 2 - 4	外生式土器 片	海生前田遺 跡、前2世 紀ごろ	周長?	長径(7.0cm)	萬葉物語の鉢土器。口縁部に横文あり。昭62(?) 考古学的発掘調査で出土。その上部表面には縦溝が多く、深井状の溝であるが、車輪印C と呼ばれるものがある。また、縦溝の内側には、人字縞模様がある。 縦溝の脇合の位置は斜め舟形土器に至り、から			外生式土器	外生式土器	脚部	2 宮内?
C-5 EUL 202	74 - 2 - 5	外生式土器 片	海生前田遺 跡、前2世 紀ごろ	長径(6.6cm)	萬葉物語の鉢土器。口縁部に横文あり。昭62(?) 考古学的発掘調査で出土。その上部表面には縦溝が多く、深井状の溝であるが、車輪印C と呼ばれるものがある。また、縦溝の内側には、人字縞模様がある。			外生式土器	外生式土器	脚部	2 松山西近郊	
C-5 EUL 203	74 - 2 - 6	外生式土器 片	海生前田遺 跡、前2世 紀ごろ	高径(8.0cm)	萬葉物語の鉢土器。口縁部に横文あり。昭62(?) 考古学的発掘調査で出土。その上部表面には縦溝が多く、深井状の溝であるが、車輪印C と呼ばれるものがある。また、縦溝の内側には、人字縞模様がある。			外生式土器	外生式土器	脚部	2 松山西近郊	
C-5 EUL 204	74 - 2 - 7	外生式土器 片	海生前田遺 跡、前2世 紀ごろ	高径(8.0cm)	萬葉物語の鉢土器。口縁部に横文あり。昭62(?) 考古学的発掘調査で出土。その上部表面には縦溝が多く、深井状の溝であるが、車輪印C と呼ばれるものがある。また、縦溝の内側には、人字縞模様がある。			外生式土器	外生式土器	脚部	2 松山西近郊	
C-5 EUL 205	74 - 2 - 8	外生式土器 片	海生前田遺 跡、前2世 紀ごろ	高径(8.0cm)	萬葉物語の鉢土器。口縁部に横文あり。昭62(?) 考古学的発掘調査で出土。その上部表面には縦溝が多く、深井状の溝であるが、車輪印C と呼ばれるものがある。また、縦溝の内側には、人字縞模様がある。			外生式土器	外生式土器	脚部	2 松山西近郊	
C-5 EUL 206	74 - 2 - 9	外生式土器 片	海生前田遺 跡、前2世 紀	高さ(12.3cm) 空	萬葉物語の鉢土器。口縁部に横文あり。昭62(?) 考古学的発掘調査で出土。その上部表面には縦溝が多く、深井状の溝であるが、車輪印C と呼ばれるものがある。また、縦溝の内側には、人字縞模様がある。			外生式土器	外生式土器	脚部	2 松山西近郊	
C-5 EUL 207	74 - 3 - 0	外生式土器 片	海生前田遺 跡、世紀 後半	高さ(23.0cm)	萬葉物語の鉢土器。口縁部に横文あり。昭62(?) 考古学的発掘調査で出土。その上部表面には縦溝が多く、深井状の溝であるが、車輪印C と呼ばれるものがある。また、縦溝の内側には、人字縞模様がある。			外生式土器	外生式土器	脚部	2 伝今治市井	
C-5 EUL 208	74 - 3 - 1	外生式土器 片	海生前田遺 跡、世紀 後半	高さ(26.5cm)	萬葉物語の鉢土器。口縁部に横文あり。昭62(?) 考古学的発掘調査で出土。その上部表面には縦溝が多く、深井状の溝であるが、車輪印C と呼ばれるものがある。また、縦溝の内側には、人字縞模様がある。			外生式土器	外生式土器	脚部	2 松山西近郊	
C-5 EUL 209	74 - 3 - 2	外生式土器 片	海生前田遺 跡、世紀 後半	高さ(11.3cm)	萬葉物語の鉢土器。口縁部に横文あり。昭62(?) 考古学的発掘調査で出土。その上部表面には縦溝が多く、深井状の溝であるが、車輪印C と呼ばれるものがある。また、縦溝の内側には、人字縞模様がある。			外生式土器	外生式土器	脚部	2 松山西近郊?	
C-5 EUL 210	74 - 3 - 3	土器	愛媛大学工芸 部本館敷地	高さ(16.0cm)	萬葉物語の鉢土器。口縁部に横文あり。昭62(?) 考古学的発掘調査で出土。その上部表面には縦溝が多く、深井状の溝であるが、車輪印C と呼ばれるものがある。また、縦溝の内側には、人字縞模様がある。			外生式土器	外生式土器	脚部	3 愛媛大学工芸部 本館敷地	

図書整理

留置 番号	保管 番号	新 旧	画種	時代	出土地	測量	カーデ 記述	規 則	付箋	注記	本 体	物 類	種 別	部位	周全形	コンテナ 番号	出土地	調査実績	
C-5 EUL 211	74-3-4	土画垂 土器	4紀以 後?	松山市久万台 大原付近	高さ(5.5cm) 幅(4.5cm)	舟形器台失痕。器台落ち、円錐と廣なり、内側と廣なり、外 側にいたるものの2基並んで直立したのこぎり。土器を 輪状に組み合せるものである。		規則			大腹 60×15	物類	筒形	器種	部位	周全形	3	松山市久万台大原 付近	
C-5 EUL 212	74-3-5	土画垂 土器	古墳時代 AD.300~ AD.700	美浜	高さ(11.3cm)	口縁斜穴器。先生形に土器残片。大腹生 れ。内側と廣なり、外側に輪状の組合せがある。		規則	T氏 古墳出土	五九、?	先生土器	無目型	全形	3	松山市吉瀬				
C-5 EUL 213	74-3-6	土画垂 土器	古墳時代	伊予守屋之 子付付近	高さ(8.8cm)	口縁斜穴器。先生形に土器残片。大腹生 れ。内側と廣なり、外側に輪状の組合せがある。		規則	北之子村	伊予村出土	土器	小形丸型	圓形	3	伊予郡伊予子村 松山市吉瀬				
C-5 EUL 214	74-3-7	土画垂 土器	古墳時代	M氏子付付内	高さ(11.5cm)	口縁斜穴器。先生形に土器残片。大腹生 れ。内側と廣なり、外側に輪状の組合せがある。		規則	伊予子村	伊予村出土	土器	小形丸型	全形	3	伊予郡伊予子村 松山市吉瀬				
C-5 EUL 215	74-3-8	土画垂 土器	古墳時代	松山市吉瀬大 字土器	高さ(12.0cm)	口縁斜穴器。先生形に土器残片。大腹生 れ。内側と廣なり、外側に輪状の組合せ がある。		規則	松山市吉瀬大器 桶穴	六一	先生土器	高秆	全形	3	松山市吉瀬大器 桶穴				
C-5 EUL 301	74-4-0	直巻蓋付 直巻身付	不明	高さ(4.2cm) 底径(3.8cm)	口縁斜穴器。先生形に土器残片。大腹生 れ。内側と廣なり、外側に輪状の組合せ がある。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直巻蓋 直巻身	直巻蓋	直巻身	全形	4	伊予子付付				
C-5 EUL 302	74-4-1	直巻蓋付	不明	高さ(3.5cm)	口縁斜穴器。先生形に土器残片。大腹生 れ。内側と廣なり、外側に輪状の組合せ がある。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直巻蓋 直巻身	直巻蓋	直巻身	全形	4	伊予子付付				
C-5 EUL 303	74-4-2	直巻蓋付	不明	高さ(3.0cm)	口縁斜穴器。先生形に土器残片。大腹生 れ。内側と廣なり、外側に輪状の組合せ がある。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直巻蓋 直巻身	直巻蓋	直巻身	全形	4	伊予子付付				
C-5 EUL 304	74-4-3	直巻蓋付	不明	高さ(4.0cm)	口縁斜穴器。先生形に土器残片。大腹生 れ。内側と廣なり、外側に輪状の組合せ がある。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直巻蓋 直巻身	直巻蓋	直巻身	全形	4	伊予子付付				
C-5 EUL 005	74-4-4	直巻身付	不明	高さ(6.0cm)	身付(酒)どうかと立上(口縁を立つ)		規則	通谷町溝辺須ノ浦 F	通谷町溝辺須ノ浦 F	直巻身	直巻身	直巻身	全形	4	通谷町溝辺須ノ浦 F				
C-5 EUL 306	74-4-5	直巻蓋付	不明	高さ(5.3cm)	直巻身付。直身付。直身付。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直巻蓋 直巻身	直巻蓋	直巻身	全形	4	伊予子付付				
C-5 EUL 307	74-4-6	直巻身付	不明	高さ(4.0cm)	直身付(3)、直身付(4)。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直身付 直身付	直身付	直身付	全形	4	伊予子付付				
C-5 EUL 308	74-4-7	直巻身付	不明	高さ(4.5cm)	直身付(3)、直身付(7)。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直身付 直身付	直身付	直身付	全形	4	伊予子付付				
C-5 EUL 309	74-4-8	直巻身付	不明	高さ(5.2cm)	直身付(3)。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直身付 直身付	直身付	直身付	全形	5	伊予子付付				
C-5 EUL 310	74-4-9	直巻身付	不明	高さ(5.0cm)	直身付(3)。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直身付 直身付	直身付	直身付	全形	5	伊予子付付				
C-5 EUL 311	74-5-0	直巻蓋付	不明	高さ(5.0cm)	直身付(3)。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直身付 直身付	直身付	直身付	全形	5	伊予子付付				
C-5 EUL 312	74-5-1	直巻蓋付	不明	高さ(5.0cm)	直身付(3)。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直身付 直身付	直身付	直身付	全形	5	伊予子付付				
C-5 EUL 313	74-5-2	直巻蓋付	不明	高さ(5.7cm)	直身付(3)。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直身付 直身付	直身付	直身付	全形	5	伊予子付付				
C-5 EUL 314	74-5-3	直巻身付	不明	高さ(6.0cm)	直身付(3)。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直身付 直身付	直身付	直身付	全形	5	伊予子付付				
C-5 EUL 315	74-5-4	直巻身付	不明	高さ(7.0cm)	直身付(3)。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直身付 直身付	直身付	直身付	全形	5	伊予子付付				
C-5 EUL 316	74-5-5	直巻身付	不明	高さ(5.3cm)	直身付(3)。		規則	伊予子付付	伊予子付付	直身付 直身付	直身付	直身付	全形	5	伊予子付付				
C-5 EUL 317	74-5-6	直巻身付	伊予市西御子子 上三郎、蘭	高さ(21.6cm)	この台付は方形容や角形容の穴を付したもの。 あり、また直身付(3)の穴を付したもの。		規則	伊予市西御子子 上三郎、蘭	伊予市西御子子 上三郎、蘭	直身付 直身付	直身付	直身付	全形	5	伊予市西御子子 上三郎、蘭				
C-5 EUL 318	74-5-7	直巻身付	伊予市西御子子 上三郎、蘭	高さ(12.6cm)	直身付(3)。		規則	伊予市西御子子 上三郎、蘭	伊予市西御子子 上三郎、蘭	直身付 直身付	直身付	直身付	全形	6	伊予市西御子子 上三郎、蘭				
C-5 EUL 319	74-5-8	直巻身付	伊予市西御子子 上三郎、蘭	高さ(12.6cm)	直身付(3)。		規則	伊予市西御子子 上三郎、蘭	伊予市西御子子 上三郎、蘭	直身付 直身付	直身付	直身付	全形	6	伊予市西御子子 上三郎、蘭				

收蔵号	管理番号	新	旧	器種	時代	出土地	法量	記述	現況	付箋	本体	種別	通物	コチナ	備考	出土地	
C-5 EUL 320	74-59	直	直	法量	松山市昭和町 高松古墳	高さ(16.3cm)	3ヶの口の中では一番高いので「最高」だと 思ひこんで置きました。皆も 下腹に一見、手を置いたもの。	植物	松山市昭和町193 発見者名 A 頃32-4.14	1940.8.20 松山市昭和町 出土者 一四二四	直 六〇八 5.9.7	直 六〇八 5.9.7	直 六〇八 5.9.7	直 六〇八 5.9.7	直 六〇八 5.9.7	直 六〇八 5.9.7	松山市高寺坂古墳
C-5 EUL 321	74-60	直	直	法量	伊予市(日高 高校生H氏持 子)	高さ(15.5cm)	横写	植物	伊予市(日高 高校生H氏持 子)	伊予市(日高 高校生H氏持 子)	直 五九七	直 五九七	直 五九七	直 五九七	直 五九七	伊予市(日高 高校生H氏持 子)	
C-5 EUL 322	74-61	直	直	法量	松山市高子 塙	高さ(12.3cm)	横写	植物	松山市高子 塙	松山市高子 塙	直 一〇四	直 一〇四	直 一〇四	直 一〇四	直 一〇四	松山市高子塙	
C-5 EUL 323	74-62	須磨口壺	須磨口壺	法量	松山市高子 塙	高さ(18.8cm) 大形壺	須磨口壺(須磨の器体に大きく描いた口周囲がある)	横写	須磨口壺	須磨口壺	直 一〇四	須磨口壺	直 一〇四	須磨口壺	直 一〇四	須磨口壺	松山市高子塙
C-5 EUL 324	74-63	須磨口壺	須磨口壺	法量	不詳	高さ(20.5cm) 直 五九六	須磨口壺(須磨口壺)	横写	須磨口壺	須磨口壺	直 五八五	須磨口壺	直 五八五	須磨口壺	直 五八五	須磨口壺	松山市久万の台
C-5 EUL 325	74-64	須磨口壺	須磨口壺	法量	松山市久万の台	高さ(26.5cm)	須磨口壺(須磨口壺をもつ長縦形)	植物	松山市(本村村 主)	松山市(本村村 主)	直 五九七	須磨口壺	直 五九七	須磨口壺	直 五九七	須磨口壺	松山市久万の台
C-5 EUL 326	74-65	須磨口壺 口壺	須磨口壺 口壺	法量	松山市高子 塙	高さ(20.0cm) とくう(とくう)	須磨口壺(須磨の器の口を直す とくう)	植物	松山市高子 塙	松山市高子 塙	直 一〇五	須磨口壺	直 一〇五	須磨口壺	直 一〇五	須磨口壺	松山市高子塙
C-5 EUL 327	74-66	須磨口壺	須磨口壺	法量	不詳	高さ(16.5cm) 直 五九七	須磨口壺(須磨口壺)	横写	須磨口壺	須磨口壺	直 五八八	須磨口壺	直 五八八	須磨口壺	直 五八八	須磨口壺	松山市高子塙
C-5 EUL 328	74-67	須磨口壺	須磨口壺	法量	松山市古墳 大岩古墳	高さ(15.5cm) 中心はすれ合 て口頭付いた壺	須磨口壺(須磨な器体の上側に 須磨を圍む各部の一部に口頭のある水波状の 横写	須磨口壺	松山市古墳大岩 古墳付近	松山市古墳大岩 古墳付近	直 九	須磨口壺	直 九	須磨口壺	直 九	須磨口壺	松山市古墳大岩 古墳付近
C-5 EUL 329	74-68	須磨平底	須磨平底	法量	伊予市高山 尾崎古墳	高さ(16.0cm) 直 五九八	須磨平底(須磨の器の一部に口頭のある水波状の 横写	須磨口壺	伊予市高山 尾崎古墳	伊予市高山 尾崎古墳	直 一〇一	須磨口壺	直 一〇一	須磨口壺	直 一〇一	須磨口壺	伊予市高山尾崎
C-5 EUL 330	74-69	須磨平底	須磨平底	法量	北高井正岡 松山市高子 塙	高さ(22.0cm) 直 五九九	須磨平底(須磨の器の一部に口頭のある水波状の 横写	須磨口壺	北高井正岡 松山市高子 塙	北高井正岡 松山市高子 塙	直 一〇二	須磨口壺	直 一〇二	須磨口壺	直 一〇二	須磨口壺	北高井正岡
C-5 EUL 331	74-70	須磨根	須磨根	法量	松山市高子 塙	高さ(9.3cm) 直 一〇三	須磨根(須磨の器の一部に口頭のある水波状の 横写	須磨口壺	松山市高子 塙	松山市高子 塙	直 一〇三	須磨口壺	直 一〇三	須磨口壺	直 一〇三	須磨口壺	松山市高子塙
C-5 EUL 332	74-71	須磨根	須磨根	法量	北高井正岡 松山市高子 塙	高さ(22.0cm) 直 五九九	須磨根(須磨の器の一部に口頭のある水波状の 横写	須磨口壺	北高井正岡 松山市高子 塙	北高井正岡 松山市高子 塙	直 一〇四	須磨口壺	直 一〇四	須磨口壺	直 一〇四	須磨口壺	北高井正岡
C-5 EUL 333	74-72	須磨器台	須磨器台	法量	不詳	高さ(16.0cm)	須磨器台(須磨の器の一部に口頭のある水波状の 横写)	須磨口壺	伊予市高 尾崎古墳	伊予市高 尾崎古墳	直 一〇五	須磨口壺	直 一〇五	須磨口壺	直 一〇五	須磨口壺	伊予市高尾崎
C-5 EUL 334	74-73	須磨子持	須磨子持	法量	不詳	高さ(24.8cm) 直 一〇六	須磨子持(須磨の器の一部に口頭のある水波状の 横写)	須磨口壺	伊予市高 尾崎古墳	伊予市高 尾崎古墳	直 一〇六	須磨口壺	直 一〇六	須磨口壺	直 一〇六	須磨口壺	伊予市高尾崎
C-5 EUL 335	74-74	須磨根	須磨根	法量	不詳	高さ(3.6cm) 直 五九五	須磨根(須磨の器の一部に口頭のある水波状の 横写)	須磨口壺	伊予市高 尾崎古墳	伊予市高 尾崎古墳	直 一〇七	須磨口壺	直 一〇七	須磨口壺	直 一〇七	須磨口壺	伊予市高尾崎
C-5 EUL 336	74-39	円筒埴輪	古墳時代後 AD500 頃	法量	不詳	高さ(9.5cm)	古墳時代後 AD500 頃	古墳時代後 AD500 頃	須磨口壺	須磨口壺	直 一〇八	須磨口壺	直 一〇八	須磨口壺	直 一〇八	須磨口壺	須磨口壺

附論

文京遺跡における縄文時代後晩期の微地形復原

外山 秀一（皇學館大学文学部）

はじめに

筆者は、『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2008年度－』（2010年3月発行）において、愛媛大学の構内遺跡である文京遺跡の発掘調査の成果に基づき、縄文時代後晩期の層準とされるIV層上面の微地形復原について報告した。その後、遺跡の北東部と北西部の一部の地域において、1次（1975年）～9次（1988年）の発掘調査の段階で基準とした地表面標高に誤差が生じていることが判明した。そこで、ここでは新たに示された修正データとともに、2009年度以降の文京遺跡での調査成果に基づき、縄文時代後晩期の旧地表面の状況を再検討することにしたい。

1. 修正に至った経緯

2010年3月に『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2008年度－』が発行された直後に、愛媛大学ミュージアムの吉田 広氏より、文京遺跡北東部の理学部棟を中心とした地域の発掘調査の際の標高データに誤差のあることが判明し、そのため縄文時代後晩期とされるIV層上面の標高に誤りがある旨の連絡が入った。

その後、この件について愛媛大学埋蔵文化財調査室の三吉秀光氏より、詳細な説明がなされた。それによると、松山市教育委員会と愛媛大学法文学部考古学研究室、同埋蔵文化財調査室による1次～9次の調査において標高の記載に誤りがあり、微起伏図作成の際に埋蔵文化財調査室から提供された基礎データに不備があったというものである。三吉氏から示された修正に関する詳細は、以下のとおりである。

文京遺跡における調査は、1次～5次が松山市教育委員会、6次～8次が愛媛大学法文学部考古学研究室、9次以降は主に愛媛大学埋蔵文化財調査室が行っている。これらの調査において、標高データに誤差が生じている。そこで、松山市作成の都市計画図（縮尺1/500）に記された地表面レベルと各調査区で確認されたそれとの対応を検討した結果、文京遺跡4次調査では約2.5m、同5・6・9次調査では約1.2m高い数

値であることが明らかになった。このことから、以下の対応が必要となる。

文京遺跡10次調査の段階で、それ以前の調査では1.157mのレベル差が生じていることが明らかになつていることから、5次・6次・9次調査については、報告における標高レベルから1.157mを引くことによって調査を行う必要がある。文京遺跡4次調査に関しては、レベルの誤差が生じている理由が不明であることから、松山市作成の都市計画図における地上面レベルを根拠として、4次調査報告の標高データから2.5mを引くことによって調整を行う必要がある。

こうした経緯に基づき、遺跡北東部と北西部地域の修正データがマップ上に示されるとともに、2009年度以降の調査によって北西部と南部において新たなデータが加わり、こうした地域のIV層上面の埋没微地形を再検討することとなった。

2. 遺跡の現地形と旧地形の復原

石手川は、現在松山城のある勝山の南を北東から南西方向に流れているが、かつては勝山の北を西に向かって流れていた時期もある。また、御幸寺山を巻くように流れる大川や大学の北側に接して西流する宮前川とともに複合扇状地が形成され、文京遺跡はその扇状部に位置している。遺跡ののるこうした扇状地は、全般的には東から西方向に向かって緩く傾斜している。

文京遺跡の地形の復原については、宮本一夫（1990）による研究がある。それによると、遺跡の現地形が50cm間隔の等高線で示され、東部から西部に向かって緩傾斜している状況が理解される。そのうえで、遺跡の南西部において弥生時代の遺跡が集中して立地する黄褐色土層に注目し、その上面高度を50cm等高線で表すことにより、現地形と同様の起伏と傾斜の状況を明らかにしている。さらに、遺跡の各調査区で検出された黄褐色土層の深度が、現地表面から平均して1mであることから、遺跡内の弥生時代の地表面を約1

m下と想定して、当時の起伏の状況を復原している。そして、弥生時代の遺構がのる微高地とその北部を西流する小河川の存在を指摘とともに、微高地の集落と谷部の水田という土地利用空間を想定している。

こうした研究から20年が経過し、文京遺跡ではこれまでに50次にわたり発掘調査とトレンチ調査が実施され、膨大なデータが蓄積されてきた。こうした調査の結果、遺跡の基本層序は5つに大別される。I層は表土層、II層は古代～近代を中心とした水田層、その下位には弥生時代から古墳時代にかけての遺構や遺物を包含するIII層、そして今回対象としている地層で縄文時代の遺構や遺物が検出されるIV層、さらには花崗岩を主体とする砂礫や礫のV層である。

ここでは、44次調査までの182地点において、450を超える標高点数と80地点以上あるIV層の検出地点のデータに基づき、現在の標高や地層の堆積状況などを1つずつ詳細に検討した。そして、縄文時代後晩期とされるIV層の上面高度を50cm間隔で求めると、標高25～30mの間の当時の微起伏が浮かび上がってくる(図14)。

なお、III層が一部欠如している地点もあるが、IV層は文京遺跡において広く分布しており、旧地表面や旧地形の状況を復原することは、当時の人がとの生活空間、とりわけ稻作農耕空間を探求するうえで、重要な意味をもつ。

3. 旧地表面の状況

文京遺跡の地表面は、本来であれば緩やかに傾斜して扇状地の地形の特徴を示すはずであるが、当時の起伏はほぼ全域で等高線に細かな乱れが生じている。このことから、人びとが自然地形を改変して生活空間として利用していたことを読みとることができる。むしろ、こうした等高線の細かな起伏の状況が重要であり、遺跡全域は小規模な微高地や平坦地と微凹地との組み合せから構成されており、前者は居住空間さらには農耕空間である可能性が考えられる。

一方、微凹地には小規模な溝が形成され、それを集めて谷状地形となっており、谷頭部はちょうど河川の河口でみられる鳥趾状三角州と逆の形態を示している。

ところで、遺跡北東部の状況をみると、既報告では南東部から北西部に緩く傾斜し、等高線はほぼ等間隔で起伏のみだれは少なく、自然地形の状況を示してい

るとした。すなわち、人間による改変が認められず、扇状地の起伏がそのまま残されているとしたところである。

ところが、修正データに基づいて把握された遺跡北東部の状況をみると、そこには他地域と同様に扇状地の自然地形を改変した状況がみられ、さらに2方向の谷状地形⑥と⑦の存在が確認される。まず、谷状地形⑥はほぼ北に向かい、遺跡北側を流れる大川の旧河道に連続するとみられる。次に、北西方向に向かう谷状地形⑦は、発掘データの欠如により途中までしか表現できていないが、西を流れる旧河道①に連続すると考えられる。

また、2009年度以降の新たなデータにより、遺跡南部では南西方向に流下する谷状地形⑧のあることが確認される。後の弥生時代中期には、同方向に流れる自然河川が確認されており、旧河道となっている。さらに、遺跡北西部では、新たな谷状地形の存在は認められないが、旧河道①の北岸の状況とより詳細な微地形を把握することができる。

これらの旧河道と谷状地形の状況を踏まえると、遺跡内では大きく3つの水系を推定できる。まず、前述した北方向に流れるもので、これは文京遺跡北側の発掘調査においても河道路が検出されていることから、北西方向に流れる川に連続するものと考えられる。次に、遺跡のはば中央を西方向に向かう旧河道①と2つの谷状地形②と③で、これらは遺跡内ではもっとも低い西端の総合情報メディアセンター付近(標高約25m)で合流する。文京遺跡の水系の大部分を占め、これらの水源はさらに東部の上流部にのびるとみられる。そして、遺跡の南西部に小規模に発達する谷状地形④と⑤で、ともに西流する。前者はいくつかの小谷を集め、小規模な水域を持つ。

このように、文京遺跡では縄文時代後晩期においても扇状地の扇央部の状況を示しながら、当時の地表面は起伏に富み、旧河道や谷状地形からなる微凹地とそれらの侵食作用を受けずに残された微高地や平坦地とが複雑に分布している。

次に、こうした微地形に縄文時代後晩期の遺構と遺物の出土状況を重ねてみたい(図15)。赤丸は遺構と土器が出土した地点、緑丸は土器のみが出土した地点を示している。これらの分布は、旧河道や谷状地形に近い場所に集中している。すなわち、谷や川と人びとの居住域とがセットになっており、水に依存した当時の



図14 縄文時代後晩期の微起伏

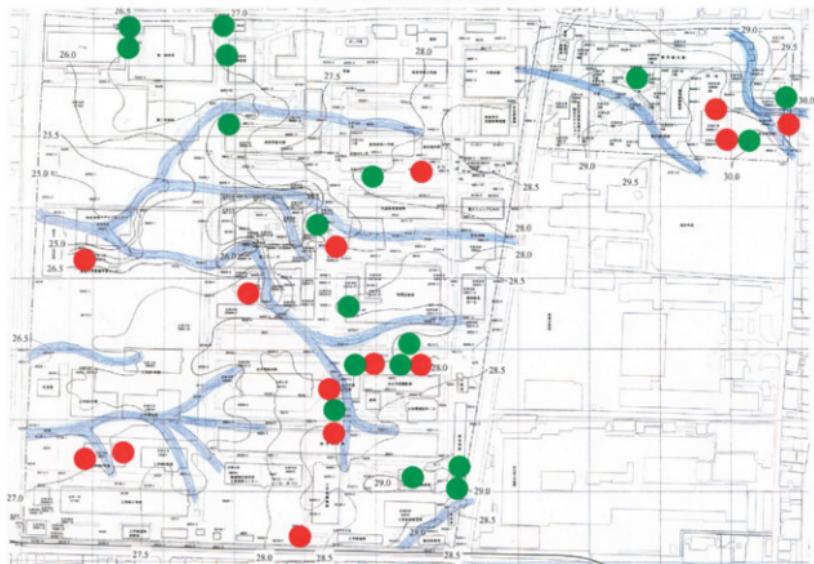


図15 縄文時代後晩期の遺構と遺物の分布

人びとの生活がみてとれる。

さらに、縄文時代後晩期とされるIV層でのイネのプランツ・オ・パールの検出状況をみると、遺跡北東部の21次と中央部の31次、そして中南部の44次の各調査地点において確認されており、いずれも遺構と遺物がセットで出土している場所である。こうしたイネの検出状況から、文京遺跡で稲が栽培されていたとする、住居の周りの平坦地や谷状地形を利用した小規模な生産域であった可能性が考えられる。

このように、文京遺跡における微地形と遺構・遺物の出土状況を踏まえると、微高地と平坦地、川や谷を利用した生活空間の様子が想定される。

おわりに

今後、文京遺跡において発掘を進めるうえで、当時の地形の微起伏を事前に把握して調査に望むことが必要であり、そこに詳細な発掘データをプロットすることで、当時の景観をより具体的に復原することができる。

今回の微地形復原で残された課題は、微高地や平坦地における土地利用の問題である。大学構内の遺跡の発掘では、全面発掘よりも小規模なトレンチ発掘が多く、広範囲の面的な調査は難しい。点の情報を線に結び、そしてそれを面に拡大して、遺跡内の微地形がどのような生活空間であったのかという視点に立って調査を進めていくことが重要である。一方、無遺物地域における土地利用のあり方についても、視点を変えて、人為的な生活空間としてみる必要もある。

文京遺跡における発掘や試掘調査は今後も継続されるが、こうした考古学的・自然科学的調査に基づく新たな知見の増加と詳細な情報の提示により、縄文時代後晩期における地表空間の探求が可能となる。

なお、本報告はあくまでも現時点における微地形の状況を示したものであり、今後微調整を重ねながら、より詳細な旧地表面の状況とそこでの人びとの生活のあり方を探ることが可能である。

引用文献

宇田津徹朗・外山秀一・田崎博之2010「文京遺跡における縄文時代後期の稻作農耕空間の探求」愛媛大学埋蔵文化財調査室編『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2008年度－』

宮本一夫1990「文京遺跡の地形復元」愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室編『文京遺跡第8・9・11次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ

※本稿で使用しているデータの中には一部未報告のものが含まれており、転載・改变使用などの際には、愛媛大学法文学部考古学研究室、愛媛大学埋蔵文化財調査室に照会されたい。

報告書抄録

ふりがな	えひめだいがくまいぞうぶんかざいちょうさしつねんぼう						
書名	愛媛大学埋蔵文化財調査室年報2011年度						
副書名							
卷次							
シリーズ名	愛媛大学埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	XXIV						
編著者名	田崎博之・吉田広・三吉秀充・外山秀一						
編集機関	愛媛大学埋蔵文化財調査室						
所在地	〒790-8577 松山市道後橋又10番13号						
発行年月日	2013/3/25						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ぶんきょういせき 文京遺跡 46次調査	まつやましぶんきょうちょう 松山市文京町3番	38201	33° 51' 2"	132° 46' 19"	2011.7.19 ~ 8.3	81.5m ²	校舎（学内保育園）改修工事
ぶんきょういせき 文京遺跡 47次調査	まつやましぶんきょうちょう 松山市文京町3番	38201	33° 51' 2"	132° 46' 23"	2011.8.18 ~ 9.6	33.1m ²	校舎（旧教育学生支援部事務室）改修工事
ぶんきょういせき 文京遺跡 48次調査	まつやましぶんきょうちょう 松山市文京町3番	38201	33° 51' 2"	132° 46' 21"	2011.10.22 ~ 10.26	142.5m ²	校舎（教育学部4号館 ブレイルーム等）改修工事
もちだいせき 持田遺跡 4次調査	まつやましもちだ 松山市持田1丁目 860番	38201	33° 50' 39"	132° 47' 2"	2012.3.2	20.8m ²	校舎（附属小学校ブル）改修工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
文京遺跡 46次調査	墓		土器棺墓	1	弥生土器		
文京遺跡 47次調査	集落	弥生～古墳					現地保存
文京遺跡 48次調査	集落		自然河川	1	弥生土器		
持田遺跡 4次調査	集落						現地保存

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

— 2011年度 —

愛媛大学埋蔵文化財調査報告 XXIV

2013年3月25日

発行 愛媛大学埋蔵文化財調査室
〒790-8577 松山市道後橋又10番13号

TEL・FAX 089-927-9127

印刷 原印刷株式会社
〒799-1594 今治市喜田村1丁目2番1号
TEL 0898-48-5511
